



1947～1955年における夜間中学校と生徒の基本的特徴(前篇)

草, 京子
浅野, 慎一

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 11(2):93-111

(Issue Date)

2018-03-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81010293>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010293>



1947～1955年における夜間中学校と生徒の基本的特徴（前篇）

Basic Characteristics of Night Junior High Schools and their Students
between 1947 and 1955 (Part 1)

草 京子* 浅野 慎一**
Kyouko KUSA* Shinichi ASANO**

要約：本稿の課題は、1947～1955年の日本における夜間中学校とその生徒の基本的特徴を、各学校レベルに降りて把握することにある。本稿でいう基本的特徴とは、まず各学校の①名称、②所在地（市町村）、③開設年月日、④1955年度以前に閉鎖された場合、その年月日と理由、⑤所在地域の特徴、そして生徒の⑥入学者数、⑦在籍者数、⑧卒業生数、⑨性別、⑩年齢、⑪就労状況等を指す。なお、こうした最も基本的な特徴さえ、そのすべてが把握しうる学校はごく少数である。それは、本稿の対象時期が戦後の混乱期、新制中学校の萌芽期であったという一般的事情に因るだけではない。当時、文部省や多くの地域の教育委員会は、夜間中学校が児童労働の容認・六三制の破壊につながるとみなし、開設を認めなかった。そこで少なからぬ夜間中学校が、不就学・長欠者の蔓延という現実への対処策として半ば非公式に開設・運営され、公式の記録も作成・保存しなかったのである。しかも1955年度以降、夜間中学校の閉鎖が相次ぎ、多くの史料が散逸した。本稿では現時点で入手し得た史料に基づき、各学校とそこでの生徒の実態を可能な限り、把握する。

序 課題と方法

戦後日本の夜間中学校は1947年に生成し、幾多の変遷を辿りつつ、今日に至っている。

特に1947～1955年度はその創成期に当たり、全国各地に次々に新たな学校が開設され、生徒数も急増した。

本稿の課題は、この時期の夜間中学校とその生徒の基本的特徴を、各学校レベルに降りて把握することにある。

各学校レベルでの把握を試みるのは、次の理由による。

まず第1に、この時期の夜間中学校は、各学校毎に極めて多様な地域的背景の下に生成した。

第2に、この時期の夜間中学校については、未発掘の事実が極めて多い。たとえば《1955-4》は、1955年度の夜間学級設置校数を120校と記しているが、現在ではその校名すら完全には確定し得ない。そこでまず実在が確認されている各学校の基本的特徴を明確にしておくことが、今後の調査研究の出発点となる。

そして第3に、各学校レベルの把握は、都府県レベル、全国レベルの正鵠な実態把握の前提である。

本稿で分析する基本的特徴とは、まず各学校については、①名称、②所在地（市町村）、③開設年月日、④1955年度以前に閉鎖された場合、その年月日と理由、そして⑤所在地域の特徴である。生徒については、⑥入学者数、⑦在籍者数、⑧卒業生数、⑨性別、⑩年齢、⑪就労状況等である。

なお、こうした最も基本的な特徴さえ、そのすべてが明確に把握しうる学校はごく少数だ。それは、本稿が対象とする時期が戦後の混乱期、新制中学校の萌芽期であり、史料が散逸したという

一般的事情に因るだけではない。当時、文部省や多くの地域の教育委員会は、夜間中学校が児童労働の容認・六三制の破壊につながるとみなし、開設を認めなかった¹⁾。そこで少なからぬ夜間中学校は、不就学・長欠者の蔓延という現実への対処策として半ば非公式に開設・運営されていた。しかも1955年度以降、夜間中学校の閉鎖が相次ぎ、その史料も散逸した。

本稿で取り扱う①各校の名称は、各地の教育委員会が認可した正式名称もあれば、通称もある。1955年度以前の史料で、名称が確認し得ないケースも多い。本稿ではその場合、後の時期の史料で確認し得た名称も含めて記載した。

③各校の開設年月日も、史料によって錯綜している。単純な誤記・誤植の可能性もある。しかし、試行的・自主的な夜間授業の開始、恒常的な教室開設、教育委員会の認可、開校式、授業開始等、多様な日がそれぞれ一定の根拠をもって「開設日」とされている場合も多い。

⑥入学者数、及び、⑦在籍者数も、夜間中学校の場合、年度途中での入退学が多いため、調査日によって同年度内でも大きな差がある。本稿では、できるだけ経年推移を捉えた史料を優先的に参照し、それができない場合に限って単年度の記載も参考にした。

⑪生徒の就労状況は、把握の方法・基準が史料毎に多様で比較が難しい。本稿では、地域の特徴、特に産業構造や労働市場との関連を重視し、職種を主な指標とした。

各史料間で記載事実に齟齬、または重複がある場合、本稿では、より古い時期の史料の記載を主に採用した。しかし、もとより後の史料で誤記が訂正された可能性もある。また古い時期の史料と

* 元夜間中学校教諭

** 神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授

(2017年9月30日 受付)
(2017年10月31日 受理)

いっても現時点で筆者が入手し得た史料の中での選択であり、初出とは限らない。したがって今後、さらなる検証が不可欠である。

史料名・頁は、《発行年－巻末の史料番号－頁》で示した。

本稿は、「第9章 兵庫県（後篇所収）」を草が、他章を浅野が主に執筆分担したが、史料の検討はすべて両者の共同で行った。

第1章 東京都

では、まず東京都について見ていこう。1955年以前、東京都には、8つの夜間中学校の存在が確認しうる。

【足立区立第四中学校第二部】

都内で最初に設立されたのは、足立区立第四中学校「第二部」²⁾だ。認可に際し、都教委から「暫定的な試案として運営し、恒久的な制度とすることは望ましくない」、「その中学校の二部授業として取扱うこと」、「名称は特別に設けないこと」³⁾等の条件が付され、したがって正式名称は「第二部」である。ただし当時の史料に「夜間学級」・「第二部（夜間学級）」⁴⁾等の呼称も見られる。なおこうした名称をめぐる事情は、当時の東京都下のすべての公立夜間中学校に共通している。

同校「第二部」は、1951年7月5日に都教委に認可され、同月16日に開設入学式を挙行了した⁵⁾。そこでこの両日のいずれかを開設日とする史料が多い。なお《1951-4-5》は、授業開始日を同月17日と記す。

当時、足立区は《1954-12》によれば、「工業地帯（特に中小企業による）が四分の一を占め、その他の四分の三は中小企業形態の商業地帯と貧農地帯とを以つて成立つて居る区であつて、区民の経済状態の程度においてまことに低い事が認められている実情にある。然るにこれに加えて嘗つての関東地方の大震災火災によつてそれまで現荒川区日暮里町方面に存在せるパタヤ街の集团的移住により一大スラブ街を本区本木町方面に形成する結果に成つたので、…（中略）…現在福祉事業における全国のモデル地区に指定せられ、その支給予算額は全国最高位を示している程である。かかる地区であるから従つて教育に関する理解は一般に低度である事はいなめない事実で、不就業対策に関して常に区内教育関係者の一大関心事であつた」。

また後の時期の史料だが《1964-6-5》は、「戦後五年経つた頃でも、…（中略）…足立区は戦後東京で最も貧しい地区になつていつた。生活扶助受給率は都内最大、日雇労働者も常時四〇〇〇を越えるという有様。…（中略）…中学長欠者数は終いに二十六年区内中学在籍者一八、〇〇〇名中一、一四〇名にのぼつた。この数は昭和二十六年の都内中学校長欠者数一〇、二八〇名の一割を楽に越す数であつたのだ」と述べる。

さらに《1971-3-20》は、「開設当時は区内に本木地区スラム街、柳原地区スラム街等があり、日雇労働者（ニコヨン）の数が少ない時で3500人を越え、多い時には5000人を越える時さえあり、しかも「戦後の東京都への地方からの流入者が非常に多数区内にとどまったという点も見逃せない」と指摘している。

同校の生徒数について、《1953-2-5》は「（開設日である7月16日の：筆者注）入学式に間に合ったのは僅かに四名にすぎなかつたが、日が経るにつれて、生徒数は急速に増加して約一ヶ月後に

表1 入学者（東京都）

	1952	1953	1954	1955	主な史料出所
足立四	51	56	44	50	《1964-6-55》《1953-2》
曳舟		57	25	30	《1964-6-63~64》（1年生入学のみ）
		204	124	78	《1962-3》
糞谷		24	26	35	《1959-3》《1964-6-73》
新星			15	45	《1959-5-6》《1964-6-65》

表2 在籍者（東京都）

年度	1951	1952	1953	1954	1955	主な史料出所
足立四	115	225	220	264	270	《1964-1》
	108	251	302	264	270	《1964-6-82》
	100	239	250	264	260	《2001-3-118》
八王子		69	67	50	33	《1964-6-82/1964-1》
		69	67	41	34	《1971-5-5》
		69	67	58	55	《2002-1-42》
		49	66	41	—	《1955-3》
立川三		19	21	24	18	《1954-5/1955-6-1》
		8	19	22	—	《1954-5》（各年度初）
双葉			55	116	105	《1964-3》
			119	110	120	《1964-6-82/1964-1》
曳舟			126	194	184	《1958-1-62》
			153	150	186	《1964-3》
			143	147	184	《1964-6-82》
			150	151	189	《1998-1-140/1998-2-48》
糞谷			82	116	132	《1964-4》
			82	116	133	《1964-6-82》
			82	111	131	《1964-1》
新星				46	60	《1958-2-16》
				41	50	《1984-1-49》

は五十余名、九月新学期開始後十日の現在に於ては、定員の百名に達し、昭和二十七年度に入り百十名、現在（1954年1月1日：筆者注）、二四五名に達している」と述べる⁶⁾。翌年度以降の入学者は、各種史料を総合すると、概ね50人前後で推移している（表1）。在籍者数は、1951年度が概ね100人強、それ以降が200～300人と増加している（表2）。卒業者数は1952年度以降、毎年50～70人強である（表3）⁷⁾。

生徒の性別は、開設当初は男女が拮抗していたが、その後、男性の比率がやや多くなっている（表5・6）。年齢⁸⁾は年度によって異なるが、在籍者概ね半数、卒業者の6～7割が学齢超過で、20歳未満と若年層が多い（表7・8）。

生徒の職種⁹⁾は、男性はプレス工・金属加工・皮革工・玩具や家具等の製造工、及び、店員が多い。女性は店員・ミシン（縫製）工・製菓・皮革工、及び、子守等が多く見られる（表9）。

【八王子市立第五中学校第二部】

東京都で二番目に開設された夜間中学校は、八王子市立第五中学校「第二部」である。「夜間学級」・「二部」等の呼称も見られる¹⁰⁾

同校「第二部」の開設日は、1952年5月1日、同10日、同12日等、史料によって多様である¹¹⁾。《1955-3-4》は10日を入学式、また後の時期の史料だが《1986-1-6》は「5月1日開設し、5月10日入学式」と記している。

八王子市について、《1964-6-8》は「八王子御召の生産地として知られ、しかも殆どが旧時代的の中小企業の上で成り立っていた。つまり八王子は最も長欠の多い地区と言えるわけである。八

王子市では中学生の長欠者は市内中学在籍者総数の二〇分の一をこえていた」と述べる。また《1979-2-97》は、「八王子御召の生産に従事するため、他府県から義務教育未修了者が女工としてたくさん入ってきた」と指摘する。そして八王子市の中で特に第五中学校に設置された理由を、《1992-1-20》は「市の中心部にあるために交通の便に恵まれていたので、長欠生徒は他校より少なかったが、ここに夜間部が併設されることになった」と記す。

開設時の入学式当日の出席者は36人であった¹²⁾。各種史料を総合すると、1952年度の在籍者数は69人だが、その後、減少傾向にあり、1955年度には30人強とする史料が多い¹³⁾。卒業者は各年度13～21人である。

生徒の性別は、在籍者・卒業者とも顕著な偏りはない。年齢は、在籍者の8割弱が学齢だが、卒業者は約半数が学齢超過で20歳以下の若年層が多い。

生徒の職種¹⁴⁾は、男性の左官見習・商店従業員、女性の女中子守を含みつつ、男性では染色工・絞あみ工、女性では織物工が大きな位置を占め、当地が「八王子御召の生産地」であることがうかがえる。

【立川市立立川第三中学校第二部】

東京都で三番目の開設校は、立川市立立川第三中学校「第二部」だ。「第二部（夜間）学級」、「夜間部」等¹⁵⁾の表記もある。

開設は、1952年5月12日¹⁶⁾とする史料が多く、《1953-2-40》《1955-6-1》はこれを授業開始日と記す。また《1954-5-10～12》は同年4月1日を開設決定、5月12日を授業開始日と記している。

立川市について、《1954-5-3～5》は「昭和14年から19年の5ヶ年間は、軍需工業によって軍都・国際都市として、俄然立川の相貌を一変し、…(中略)…昭和20年終戦によって人口は急激に減少したが、駐留軍の基地となって再び国際都市として人口の増加がはげしく、「生産都市ではなく、消費都市として宿命的に発展した」と述べる。開設当時の状況については、「軍事基地としての飛行場の面積は市の約4分の1を占めている。広大な基地に付随する工場の他には生産工場もなく、…(中略)…常に軍需景気を裏づけにしているので政治的にも経済的にも文化的にもすべての点に落ちつきを失っている。…(中略)…常時離着陸する大型郵送機の爆音や新鋭機の不気味な騒音に妨げられる一方、目にするものは駐留軍兵士とその関係の特殊女性、旅館貸室、飲食店など目にあまるものばかりである。競輪、パチンコ風景もまた人の心をかき乱し、落ちつきを欠いている」と描写している。

後の時期の史料だが《1964-6-25》も、「敗戦による工場の消失、米国の極東空軍基地がおかれてからの人口の浮動、増加等によって、敗戦日本の代表的基地、植民地的様相の代表都市として有名になり、批判の対象ともなつて、『教育の真空地帯』とまで叩かれたのは、一九五〇年前後であった」と記す¹⁷⁾。

さて、《1954-5-12》によれば、1952年5月12日の授業開始時、「生徒の招集に走り廻ってやっと4名の生徒を集めることができた」という¹⁸⁾。在籍者数は各年度概ね18～24人で推移した¹⁹⁾。卒業者数は確認し得ていない。

生徒の性別は、在籍者でみる限り、男女が概ね拮抗している。年齢は1954年度の在籍者では、過半数が学齢である。

表3 卒業者（東京都）

年度	1952	1953	1954	1955	主な史料出所
足立四	50	63	71	53	《1954-13-4/1955-1-8/1957-1》(注)
八王子	14	21	16	13	《1955-3/1962-4-1》
双葉		—	28	34	《1962-4-1/1970-2》
		—	28	24	《1969-1/1970-1-付10》
曳舟		18	45	73	《1958-1-62》
糞谷		11	37	44	《1959-3》
新星			15	20	《1958-2-16》

(注) 第1回卒業式・第2回卒業式の記載に一部不明な点がある。

表4 性別（入学者）（東京都）

年度		1953	1954	1955	主な史料出所
曳舟	男性	143	77	50	《1962-3》
	女性	61	47	28	

表5 性別（在学者）（東京都）

年度		1951	1952	1953	1954	1955	主な史料出所
足立四	男性	54	151	—	168	163	《1951-1-10/1951-4-10/1953-2/1954-13/1955-1-36》
	女性	46	100	—	94	77	
八王子	男性		15	31	20	—	《1955-3》
	女性		34	35	21	—	
	男性		35	32	31	29	《2002-1-42》
	女性		34	35	27	26	
立川三	男性		4	10	11	—	《1954-5》 (各年度初)
	女性		4	9	11	—	
	男性		10	11	11	8	
女性		9	10	13	10		
曳舟	男性			109	—	128	《1962-3-8》
	女性			43	—	51	
新星	男性				20	26	《1958-2-16》
	女性				26	34	

表6 性別（卒業者）（東京都）

年度		1952	1953	1954	1955	主な史料出所
足立四	男性	22	39	40	—	《1954-13/1955-1-8》
	女性	28	24	31	—	
	男性	22	39	38	34	《1962-4-1》
	女性	28	24	33	19	
	男性	24	38	40	37	《1967-3-20》
	女性	26	25	31	16	
八王子	男性	5	8	11	7	《1955-3-6～7/1967-3-20》
	女性	9	13	5	6	
双葉	男性			12	23	《1962-4-1》
	女性			16	11	
	男性			12	11	《1969-1》
女性			16	13		
曳舟	男性		15	36	44	《1962-3/1964-8-20》
	女性		3	11	29	
糞谷	男性		7	32	32	《1959-3》
	女性		4	5	12	
	男性		7	32	31	《1962-4-1》
	女性		4	5	12	
	男性		7	32	21	《1967-3-20》
	女性		4	5	12	
新星	男性			7	7	《1962-4-1》
	女性			5	13	
	男性			10	8	《1966-6-4/1968-2-4》
	女性			5	12	
	男性			10	10	《1967-3-20》
	女性			5	10	

生徒の主な職種²⁰⁾は、男女とも販売・サービス職がやや多い。

【葛飾区立双葉中学校第二部】

葛飾区立双葉中学校「第二部」は、1953年4月20日に開設された²¹⁾。

葛飾区について、後の時期の史料だが《1964-6-8》は、「農業が中小企業と共に存在している…(中略)…。組み合わせたうらぶれた商業街もあり、個人経営の使用人一、二名のプレス業もある。…(中略)…葛飾も足立・荒川区に次ぐ大量の長欠を抱えていたのである」と述べる。《1986-1-7》も長欠者が多い背景を、「区の経済的背景が、造花、革、染色、プレスといった零細な仕事にたよる面が強く、貧困な家庭が多かったから」と述べ、「場所が双葉中学になったのは、地の利のほか、空いている木造の独立校舎が存在したから」と記している。

開設時の入学者は5人前後²²⁾、各年度の在籍者は100人強、卒業者は24~34人である²³⁾。

生徒の性別は、卒業者で見ると、大きな偏差はない。ただし《1955-7》で1955年度の在籍者を見ると男性74人、女性38人と男性がかなり多い。これが恒常的傾向か否かは確認し得ない。

年齢は、在籍者の約7割が学齢、卒業者では約7割が学齢超過者である。卒業時に学齢を若干越える若年層が多かったようである。

生徒の職種等は、確認し得ていない。ただし前述の地域概況をふまえれば、零細企業の製造工が多かったと考えられる。

【墨田区立曳舟中学校第二部】

墨田区立曳舟中学校「第二部」には、「第二部(夜間部)」「第二部授業」「夜間部」等の表記もある²⁴⁾。

開設日は、1953年5月1日とする史料が多いが、一部には同年5月10日とする史料もある²⁵⁾。

墨田区について、後の時期の史料だが《1964-6-9》は「足立とも葛飾とも異なる(ママ)点は農業が皆無と言える点で、逆に極度に土地が細分化されている。工場数は都内で最高五〇〇〇を越す。これは非常に工場が、しかも零細の工場がこの地に密集していることを物語っているものである。当然ながら人口密度も高く、この小工場に働く青少年の数も多い。特にオモチヤ等の型押しは一人の徒弟で一台の機械というものも多い…(中略)…。長欠率は二十八年で中学三、四パーセント、同年東京の平均三、一九を少し上まわる。しかしここにはそれだけでなく江東六区の特徴とも言える地方の義務教育未終了の潜入を多く抱えている」と述べる²⁶⁾。また《1971-3-26》も、「本校学区内地域は元来家内工業を経営するものがなく、地方から上京し住み込み、これらの労務に従事するものが多い」と指摘する。

開設当日の入学者数は、史料によって57人から130人まで幅があるが、総じて多い²⁷⁾。また開設直後から生徒数が急増したことが、多くの史料から読み取れる。ただし翌年度以降、入学者はやや減少し、1955年度には78人となっている。在籍者は各年度126~194人で、特に1955年度に最も多くなったとする史料が多い²⁸⁾。卒業者も1953年度の18人から、1955年度の73人に増加した。

生徒は、入学・在籍・卒業のいずれで見ても、男性が女性の概

表7 年齢別(在籍者)(東京都)

年齢	12~15	16~19	20~	計	主な史料出所	
足立四	1953年度	57	69	15	141	《1954-14》(調査日出席者)
	1954年度	154	98	10	262	《1954-13-26》
	1955年度	128	89	23	240	《1955-1-36》
八王子	1954年度	32	9	0	41	《1955-3》
立川三	1954年度	16	3	5	24	《1954-5》
	1955年度	10	4	4	18	《1955-6-3》
曳舟	1953年度	81	69	2	151	《1953-1》 (元史料も計と不一致)
	1955年度	129	46	5	180	《1955-13》
年齢	~15	16~20	21~	計	主な史料出所	
双葉	1955年度	83	25	4	112	《1955-7》
糞谷	1955年度	83	48	16	147	《1955-11-7》
新星	1955年度	32	14	4	50	《1955-9》
年齢	適齡児	過年児	計	主な史料出所		
曳舟	1953年度	81	71	152	《1962-3》	
	1955年度	131	51	186		

表8 年齢別(卒業者)(東京都)

年齢	~15	16~20	21~	計	主な史料出所	
足立四	1952年度	15	29	6	50	《1964-6-90》
	1953年度	20	35	8	63	
	1954年度	24	38	9	71	
	1955年度	22	20	11	53	
八王子	1952年度	7	5	2	14	
	1953年度	9	12	0	21	
	1954年度	8	7	1	16	
双葉	1954年度	8	17	3	28	
	1955年度	11	23	0	34	
曳舟	1953年度	5	11	2	18	
	1954年度	18	23	5	46	
	1955年度	24	43	6	73	
糞谷	1953年度	5	6	0	11	
	1954年度	14	16	7	37	
	1955年度	18	21	4	43	
新星	1954年度	8	6	1	15	
	1955年度	11	6	3	20	
年齢	~15	16~19	20~29	計	主な史料出所	
新星	1954年度	7	7	1	15	《1984-1-52》
	1955年度	11	6	3	20	
年齢	加年児	その他	計	主な史料出所		
糞谷	1953年度	1	10		11	《1964-5》 加年児は卒業時18歳以上。
	1954年度	13	25		38	
	1955年度	8	35		43	

ね2~3倍と多い²⁹⁾。年齢は在籍者は5~7割が学齢、卒業時は6~7割が学齢超過である³⁰⁾。

生徒の職種は確認し得ないが、前述の地域概況からみて、零細企業の製造工が多かったと考えられる。

【大田区立糞谷中学校第二部】

大田区立糞谷中学校「第二部」は、1953年9月1日、羽田中学校校内仮教室において開設入学式を挙行了³¹⁾。同校は、1953年11月25日に新校舎に移転した。

同校の所在地域について、後の時期の史料だが《1964-6-9》は、「臨海工業地帯の一部を形成するところであるが、この地区にもやはり戦前から貧困による長欠の問題があり尋常夜学校の存在していた土地である。この戦前の尋常夜学校の対象は東京湾の零細漁民の子弟であったという。戦後これらの漁民は一時のり・あさり等のあきないで可成りの収入をあげたようであるが、二十六年をこえるあたりから工場の廃液による漁区の汚染、さらには東京湾埋立て等で急激に不漁にみまわれはじめた。そしてこの外からくる貧困と漁民に多い教育関心のうすさからついに昭和二十八年頃は長欠率はぐんぐん上昇していった」と述べる³²⁾。

また《1983-2-2》は、「糶谷に付設されましたのは、大田区の中でも、比較的戦災の打撃の大きかった海岸地帯に、不就学の率が多かった地域関係で決定されたと思います。以上の次第で二部の名称は糶谷を冠しましたが、実際は太田区中学校二部として発足したのです」と記している。

開設時、入学者は約24人だった³³⁾。その後も各年度、26～35人が入学している。在籍者は1953年度の82人から、1955年度には130人強へと増加した³⁴⁾。卒業者も1953年度の11人から、1955年度には44人に増加している³⁵⁾。

生徒は卒業者でみる限り、男性が多い。特に1954年度以降、その傾向は顕著だ。《1955-11-6》によれば、1955年度の在籍者も男性96人、女性51人で、男性が多い。年齢は在籍者は過半数が学齢、卒業者では6割前後が学齢超過である³⁶⁾。

《1971-3-29》によれば、「生徒は初め頃は、羽田、大森地区の漁師の子弟が半数を占めていた」。また《1976-4-5》は「漁師の服装のまま登校する生徒が多かった。工場で働いていても、家は漁師のものも多かった」と述べ、《1992-1-24》は「漁業に直接たずさわっている者や家事である漁業がだめになり町工場で働いている者もいた」と記している。

そして1955年度の生徒の職種³⁷⁾をみると、男性は店員・機械工・硝子工・雑役工・旋盤工、女性は家事手伝いが最も多く、それ以外では硝子工・雑役工等が多数を占める。漁師は2人、海底作業が1人、いずれも男性に見られるが、人数は少ない。漁業が衰退し、男児は漁家の子供も含め工場や商店に勤務するようになり、女兒は引き続き家事手伝いに従事していたことが窺える。

【足立区立第五中学校補習授業】

足立区立第五中学校では、夜間の「補習授業」が実施された。後の時期の史料だが《1976-3》《1976-1》は、同授業の開設を1954年4月1日としている。

同「補習授業」は、東京都他の夜間中学校とは異なり、都教委の認可を得た公式のものではない。

具体的な実態は不明な点が多いが、《1977-2-83》によれば、同校のある教師が長欠生徒の訪問調査をふまえ、「本校で夜学をやろう」ということになり、「早速このことを職員会へ計ったが、全員の賛同は得られなかった。そこで有志だけで夜間の補習授業をやることにした。法規的な知識に明るく人がなく認可規定などは知らないでやった、無認可の夜間学級である。…(中略)…生徒は20名、その内の12名位が常時出席者であった。年齢は13才～28才、なかに在日朝鮮人児童もいた。…(中略)…この学級、当時者(ママ)以外は知る人もなく、夜間中学関係の記録からも欠落したまま今日に至っていた。まさにまぼろしの夜間学級だったのである」。

【世田谷区立新星中学校第二部】

1955年以前、東京都で最後に設立されたのは、世田谷区立新星中学校「第二部」だ。「夜間学級」³⁸⁾の表記もある。

同校「第二部」の開設日は、1954年5月1日とする史料が多く³⁹⁾、これは《1955-9》によれば第1回入学式の日である。

表9 主な職種(東京都)

	年度	性別	主な職種	主な史料出所
足立四	1951	男性	プレス工、器具製造、菓子製造、製靴業、大工、鉄工 電気工	《1951-1-15》 《1951-4-15》
		女性	草履製造、洋服工場、製靴業、刷毛製作、事務職員	
	1953	男性	鉄工、プレス工、ジュラルミン加工、皮革工、玩具製造、売店、新聞売	《1953-2》
		女性	売店、ミシン工、製菓、袋物工、皮革工、玩具製造	
	1954	男性	プレス工、店員、旋盤工、製菓、皮革工、家具製造、給仕、塗装工	《1954-13》
		女性	留守居子守、製菓、ミシン工、皮革工、女中、店員	
1955	男性	プレス工、雑貨製造、店員、皮革工、旋盤工、食品加工、家具製造	《1955-1-43》	
	女性	雑貨製造、家事手伝い、食品加工、店員、給仕、子守		
八王子	1954	男性	左官見習(3)、染色工(2)、絞あみ工(2)、商店従業員(5)	《1955-3-20》
		女性	織物工(11)、女中子守(7)、家の手伝(2)	
立川三	1955	男性	酒屋店員、牛乳屋店員、書籍店員、機械見習工、ミシン組工、米屋店員、時計組立工、瓦製造工、自動車修理工、菓子製造工、	《1954-5》
		女性	洋服商店員、パーマメント、子守、女中(4)	
	1955	男性	ミシン組立工、瓦製造工、酒店員、牛乳店員、生花店員、木材店員	《1955-6-5》
		女性	飲食店雑役(4)、自家手伝(3)、会社給仕、病院雑役	
糶谷	1955	男性	店員(18)、機械工(12)、硝子工(10)、雑役工(10)、旋盤工(6)	《1955-11-8》
		女性	硝子工(7)、雑役工(7)、家事手伝(22)	
新星	1955	男性	工場(4)、商店(13)、その他(5)	《1955-9》
		女性	工場(7)、商店(5)、女中等(3)、留守番等(11)、その他(2)	

後の時期の史料だが《1964-6-10》によれば、世田谷区には「世田谷郷(現在の下馬町)といわれる地区があり、満洲引揚げ者等の困窮家族が引揚げ住宅を中心に次第に集まり、貧困に依る無気力と一種の混乱をそこにかもしだした。つまりはスラムである。この地区の小学校では当時生活保護や教育扶助受給率は実に数十パーセントに至つたという」⁴⁰⁾。また《1964-6-119》で同校校長の福島恆春氏も、「背後に俗称『世田谷郷』と称する引揚げ者の大集落を旧連隊跡に持ち、前は日雇労働者の毎日の受付、その前の道路には毎日朝市がたつという珍しいところ、また隣りは、第八朝鮮人初等学校(北鮮系)があり、いくたの困難な教育課題を含んでいる」と記している。開設場所として新星中学校が選ばれた理由を、《1964-6-10》は世田谷区の中で「特に新星中学校に籍のある長欠者が他校を抜いて最高」であったことに加え、「交通の便のよさ」もあったと述べる⁴¹⁾。

入学者は開設時に15人、翌年度は45人である。在籍者は、1954年度が40人強、1955年度が50～60人であった⁴²⁾。卒業者は、各年度15～20人である。

生徒の性別は在籍者でみる限り、やや女性が多い⁴³⁾。ただし卒業者では、顕著な偏差は見られない。年齢は在籍者では約6割が学齢、卒業者も約半数が学齢である。

生徒の職種は、1955年度は男性は商店、女性は留守番や工場・商店勤務が多かった。後の時期の史料だが《1984-1-37》《1994-1-13》で元教諭の重田統子氏は「お風呂屋の釜たきやったり美容院の手伝いやったり。パチンコ屋に勤めたり八百屋の小僧さんとか、それからいわゆる昔の女中さんとか家事手伝いとか子守りとか。…

(中略) …三年編入の多い人は床屋さんと美容師さんが多かったですね、「理・美容院で働きながら『中学校卒業』資格をとりにくるケースや、逆に、鉄道専門学校を目指し編入学したのに制度変更でいけなくなった国鉄労働者もいた。大工・左官屋で修行中の者、八百屋等の店員、渋谷で靴磨きをしていた少年もいた」と述べている。総じて製造工より、販売・サービス職が多かったようである。

第2章 神奈川県

神奈川県には、12の夜間中学校の存在が確認し得る。

【「舵っ子夜学」・横浜市立浦島丘中学校二部学級】

神奈川県で最初に開設された夜間中学校は、横浜市子安浜の「舵っ子夜学」だ。

開設日は1948年2月4日とする史料が多い⁴⁴⁾。1950年5月に開設とする史料も少なくないが、これは後述する如く、横浜市教育委員会の認可の下、市立浦島丘中学校の二部学級と位置づけられた日付である。また《1966-2-9~10》は、「昭和23年1月より小学校6年の課程から教え始め、中学校課程に移行する必要から、昭和24年4月に開校された」と記している。

当該地域について、後の時期の史料だが《1968-1-A11~13》は、「本校の夜間学級は昭和23年2月子安浜の分教場として…(中略)…子安浜の民間有志の人々の手により、非公認の民間学校の性格をもつた学校として開校された。…(中略)…生徒は主に関東の北地域から、農村の口減らしとしてやつてきた子供たちと、漁師の子供たちから構成されていた。小舟をあやつる沿岸漁師にとつては、これらの子供も重要な労働力であつた」と述べている⁴⁵⁾。また《1976-2-6》も「子安浜では、零細漁業のため、とくに人手を要し、そのために多くの若年労働者が使われた。小学校を卒業した少年達はまさにいちばんの『適任者』だった」と述べる。そして《1978-1》も「横浜市の子安浜で『かじっ子夜学』が開かれました。子安浜では地方の貧しい農家から前借金で売られてきた子どもたちが多く、彼らは『かじっ子』とよばれ舟に乗り漁労に従事していました。朝六時に浜を出て帰るのが夕方六時ごろ。一二時間の労働で当然学校へは行けません。見かねた漁業組合の人や教師が相談して、組合事務所の二階に夜間学級を開いたのです」等と記している。

1950年、この「舵っ子夜学」は、横浜市教育委員会により、市立浦島丘中学校の二部学級として認可された。二部学級としての設置日は、5月1日、同月20日、同月22日とする史料が多い⁴⁶⁾。

なお後述する如く、「舵っ子夜学」は子安浜の東浜と西浜にそれぞれ漁業協同組合で1教室ずつ開設されたが、認可の経過について、《1969-2-23》で同校校長・飯田越夫氏は次のように述べる。「昭和23年以來子安浜漁業地帯に開設された二つの夜間学級(は：筆者注)…(中略)…文部省の認めないもので、あくまでも横浜市教育委員会条例による青少年指導対策委員会の事業の一環として、不就学生徒に対し、少しでも教育の機会を与えてやるという意味で、夜間二部学級として設置を認めたという歴史をもっている。また当時占領下において、アメリカ軍政部の『日本人は法を定めておきながら、自分の手でそれを破っている。夜間中

表10 在籍者(神奈川県)

年度	1953	1954	1955	主な史料出所
蒔田	48	44	43	《1964-3》
西	54	49	46	
港	11	13	12	

表11 卒業生(神奈川県)

年度		1950	1951	1952	1953	1954	1955	主な史料出所	
浦島丘	本校	男性	3	7	18	6	6	3	《1968-1-A12》
		女性	0	1	4	0	1	2	
	東浜	男性	8	4	10	1	6	6	
	西浜	男性	12	0	11	7	10	4	
	計		23	12	43	14	23	15	
鶴見	男性	5	4	0	0	2	7	《1970-1-10》	
	女性	0	0	0	0	0	0	《1966-2》	
	計	5	4	0	0	2	7		
平楽					5	4	7	《1964-3》	
		2	4	3	3	4	2	《1966-2》	
蒔田	男性		3	12	18	4	6	《1959-4》	
	女性		2	3	5	5	5		
	計		5	15	23	9	11		
	計				9	11	9	《1964-3》	
	計			40	18	24	13	《1966-2》	
西			18	28	23	12		《1964-3/1966-2》	
港					10	5	4	《1964-3》	
		7	11	10	5	4	6	《1966-2》	
戸塚					8	4	6	《1964-3》	
		6	11	7	8	7	3	《1966-2》	
川中島					7	16	16	《1964-3》	

学校を設置するより、社会保障を充実して、不就学の対策にあたるのが当然であろう」という強い意見や勧告もあつたため、夜間という文字をさけて二部授業の延長としての、二部学級と呼んだ苦勞もあつた。

「舵っ子夜学」の東浜・西浜の教室はそれぞれ浦島丘中学校の東浜・西浜分校とされ、本校でも独自の教室が開設された⁴⁷⁾。

さて、「舵っ子夜学」の開校式は漁業共同組合事務所で行われ、当時の入学者は、《1976-2》によれば、中学が49人、小学が24人、すべて男性であった。

《1954-3-11》は、1953年度の在籍者数を50人と記す。また《1976-2-1》は、「(1952年：筆者注)当時生徒数は東浜・西浜両分校で五十名前後にも及ぶほどの盛況であり、本校は常に五名前後として、両分校の比ではなかった」と述べる。《1955-12》は、1955年当時について「東浜分校十一名、西浜分校二十二名、(本校生徒数を除く)」としている。卒業生数は、各年度12~43人である(表11)。

生徒は卒業生でみる限り、ほとんど男性だ。特に東浜・西浜分校の生徒はすべて男性だった。年齢は確認し得ないが、設立理由をふまえれば学齢が多く、卒業時には学齢超過者も少なくなかったと思われる。

生徒の職種は、統計的史料は入手し得ていないが、《1955-12》は、生徒の「約三割が栃木、群馬、埼玉、茨城、福島等の関東地方周辺地域の貧農の子弟が集り、又東京羽田附近の漁村子弟が貰われてきて漁労に従事している。この傾向は次第に改められ、年々漸減の傾向である」と記す。《1976-2-3》は「(東浜・西浜)の二教室は漁業に従事している子供達のためにあつた。…(中略)…本校の夜学に通ってくる生徒の大部分は、横浜市内に住居を持

ち、種々雑多な職業にたずさわっている子供達を中心にしていた。…(中略)…なかには地方から都会へ働きに出てきた生徒もいた。職業は大部分工具であった」と記している。

【横浜市立豊岡中学校(鶴見中学校) 二部学級】

次に、横浜市立豊岡中学校「二部学級」についてみる。豊岡中学校は、1951年7月10日、鶴見中学校と校名が変更された。

1950年5月頃、前述の「舵っ子夜学」が浦島丘中学校二部学級として認可されると前後して、横浜市各区の10校に「二部学級」が開設された。豊岡中学校での開設も、その一環だ。したがってこれらの正式名称はすべて「二部学級」である⁴⁸⁾。

豊岡中学校を含め、横浜市の各校「二部学級」の開設日は史料によって、また学校毎に異なる。豊岡中学校の開設日は、1950年4月1日、5月1日、5月20日、5月25日等と記す史料がある⁴⁹⁾。

在籍者数は、《1954-3-11》が1953年度に7人と記している。卒業生数は各年度0～7人で、全員、男性である。

生徒の年齢・職種等は、管見では確認し得ていない。

【横浜市立平楽中学校二部学級】

横浜市立平楽中学校「二部学級」の開設日は、1950年5月1日、及び、4月1日とする史料が多い⁵⁰⁾。

在籍者数は、《1954-3-11》が1953年度のそれを13人と記す。卒業生数は、各年度2～7人で推移している。

生徒の性別・年齢・職業等を記した史料は入手し得ていない。

【横浜市立蒔田中学校二部学級】

横浜市立蒔田中学校「二部学級」の開設日は、1950年4月1日、同4月5日、5月1日、5月5日等、史料によって多様である⁵¹⁾。

在籍者数は各年度40人強(表10)、卒業生数は史料によって大きく異なるが各年度概ね5～40人である。

生徒の性別は卒業生でみれば限り、傾向的な偏差は見られない。年齢・職種等は、確認し得ていない⁵²⁾。

【横浜市立西中学校二部学級】

横浜市立西中学校「二部学級」の開設日は、1950年5月1日、または同年4月1日等とする史料が多い⁵³⁾。

在籍者数は各年度50人前後、卒業生は12～28人であった。

生徒の性別・年齢・職種等については確認し得ていない。

【横浜市立港中学校二部学級】

横浜市立港中学校「二部学級」⁵⁴⁾の開設日も史料によって多様で、1950年4月1日、同30日、5月1日、同10日等がある⁵⁵⁾。

在籍者数は各年度10人強、卒業生数は4～10人である。

生徒の性別・年齢・職種等については確認し得ていない。

【横浜市立浜中学校二部学級】

横浜市立浜中学校「二部学級」⁵⁶⁾の開設日は、1950年5月1日、及び、5月5日とする史料がある⁵⁷⁾。

同学級は《1965-1》によれば、「生徒減少」のため、1955年3月1日に閉鎖された⁵⁸⁾。

《1954-3-11》は、1953年度の在籍者を13人と記している。卒業生数、生徒の性別・年齢・職種等は確認し得ていない。

【横浜市立保土ヶ谷中学校二部学級】

横浜市立保土ヶ谷中学校「二部学級」⁵⁹⁾の開設日は、1950年4月1日⁶⁰⁾とされる。

同学級は《1976-2》によれば、「生徒数減少により」、1956年3月31日に閉鎖された。

《1954-3-12》は、1953年度の在籍者を24人と記している。卒業生数や生徒の属性は、確認し得ていない。

【横浜市立大綱中学校二部学級】

横浜市立大綱中学校「二部学級」⁶¹⁾の開設日は、1950年4月1日、または同年5月1日とされる⁶²⁾。

《1954-3-12》は、1953年度の在籍者を12人と記す。

卒業生数、生徒の属性は確認し得ていない。

【横浜市立戸塚中学校二部学級】

横浜市立戸塚中学校「二部学級」の開設日は、1950年4月1日、または5月1日とされる⁶³⁾。

《1954-3-11》は、1953年度の在籍者を19人と記す。各年度の卒業生数は3～11人である。

生徒の性別・年齢・職種等は、確認し得ていない。

【川崎市立川中島中学校夜間学級】

川崎市には、2つの夜間中学校があった。

一つは、川崎市立川中島中学校だ。当時の史料から名称は確認しえず、後の時期の史料に「夜間学級」⁶⁴⁾の呼称が見られる。

開設日は史料によって多様で、1953年4月1日、5月1日、5月11日、6月1日等の記載がある⁶⁵⁾。

《1954-3-12》は、1953年度の在籍者を36人と記している。卒業生数は1953年度は7人だが、それ以降は16人に増加している。

生徒の性別・年齢・職種等は管見では確認し得ていない。

【川崎市立塚越中学校夜間学級(特別学級)】

川崎市立塚越中学校は、やはり後の時期の史料だが「夜間学級(特別学級)」⁶⁶⁾の呼称が見られる。

開設日は、1953年5月1日、及び、同11日とする史料がある⁶⁷⁾。

《1954-3-12》は、1953年度の在籍者を32人と記す。

生徒の性別・年齢・職種等は確認し得ていない。

第3章 愛知県

愛知県には、2校の夜間中学校が開設された。いずれも名古屋市内である。

【名古屋市立天神山中学校二部学級】

名古屋市立天神山中学校「二部学級」⁶⁸⁾の開設日は、1952年12月10日、同15日、同20日等とする史料が見られる⁶⁹⁾。

在籍者数は各年度20～65人で(表12)⁷⁰⁾、卒業生は10～26人である(表13)。

生徒の性別は、女性が男性を若干上回る⁷¹⁾。年齢は1954年度の在籍者でみる限り、15歳以下が約3分の2を占める(表14)。

職種は男女とも工員が最も多く、徒弟が次ぐ(表15)。製造工が大きな位置を占めたようである。

【名古屋市立東港中学校二部学級】

名古屋市立東港中学校には当時の史料で「夜間学級」⁷²⁾との名称も用いられている。ただし後の時期の史料だが《1966-2-10》は「二部学級という名称にする」と記している。

開設日は、1952年12月15日⁷³⁾とする史料が多い。

在籍者数は各年度32~44人⁷⁴⁾、卒業生数は9~18人である。

生徒は、男性が女性を若干上回っている⁷⁵⁾。年齢は確認し得ていない。

職種は、男性は工員、女性は家庭での留守番・子守が多い。

第4章 三重県

三重県で確認し得る夜間中学校は、1校のみである。

【上野市立崇広中学校夜間学級】

上野市立崇広中学校「夜間学級」⁷⁶⁾には、「夜学」・「夜間部」⁷⁷⁾等の表記もみられる。

開設日は、1950年9月1日、及び、同月18日とする史料がある⁷⁸⁾。《1979-1-213》は、9月1日を授業開始日と記す。上野市立久米小学校校舎の一部を借用して開設された。

所在地域について、《1954-2》は「本校通学区の八幡地区は本校開校以来不就学並に永欠生徒多く全校の七割を越える状態」と記す。また後の時期の史料だが、同校の運営に携わってきた和田清和氏は《1959-1》で生徒に被差別部落の貧困な家庭の子供が多く、「通学するよりも、紐を織って、生活の資を得るために働いて家庭の収入を増加させなければなら」ず、「両親が外へ出て働くと、幼い弟や妹の世話をしなければならぬ。こんな理由で女子に不就学が多くなってき」と述べている。《1967-4-69》も、当地を「帯止づくりの家内工業地区」と記す⁷⁹⁾。

《1959-1》は、開設時の入学者数を24人と記す。在籍者は1950年度は62~70人と多かったが、その後は概ね30人前後である⁸⁰⁾。卒業生は1953年度に8人、1955年度に3人であった⁸¹⁾。

生徒の性別は、開設時の1950年度は男性も半数弱を占めたが、1951年度以降はほとんど女性である⁸²⁾。《1959-1》も「初めは…(中略)…男の子もいましたが、半年ぐらいの間に、本校に通学するようになり、…(中略)…残っているのは、女の子ばかり」と記す。

年齢は、1953年度の在籍者は多くが15歳以下だ。ただし1954年度の卒業生は18~20歳とすべて学齢を超過している。また《1951-2》は、「開設当時は本校不就学生の外小学生、学令満期の者も十数名あり」と記している。

生徒の職種を示す統計的史料は入手し得ていない。ただし《1954-2》は「生徒は家事手伝、子供の守、留守番をなすかたわら紐をなし家計を助けている」とし、《1954-6》も「紐ひも織り」で「家計の大きな手助け」と記している。前述の地域状況からみても不就学者と同様、女性の紐組織工、及び、留守番・子守

表12 在籍者・性別(愛知県・三重県)

年度		1950	1951	1952	1953	1954	1955	史料出所
天神山	男性			19	18	25	28	《1963-2》
	女性			25	29	35	37	
	計			44	47	60	65	
東港	計			20	27	26	25	《1966-2》
	男性			21	32	26	20	《1975-2-418》
	女性			14	12	15	21	
	計			35	44	41	41	《1966-2》
崇広	男性			19	26	19	19	《1963-2》
	女性			13	11	13	19	
	計			32	37	32	38	
	男性	30	0					《1951-2》
	女性	42	23					
	男性	30	0	10	0	0		《1954-2》
女性	40	23	26	31	27			
男性	20	0		0	0		《1951-3/1953-4/1954-7》	
女性	42	18		28	29			
計	62	32	34	34	27	32	《1950-1/1965-1》	
計	70	23	36	31	27		《1954-2》	

表13 卒業生・性別(愛知県・三重県)

年度		1952	1953	1954	1955	主な史料出所
天神山	計		17	26	25	《1964-3》
	男性	4	9	10	10	《1970-1-10》
	女性	6	8	16	15	
	計	10	17	26	25	
	男性	8	9	10	10	《1975-2-417》
女性	15	8	16	15		
計	23	17	26	25		
東港	男性	4	11	5	12	《1975-2-418》
	女性	6	1	4	6	
	計	10	12	9	18	《1964-3/1975-2-418》
崇広			8	0	3	《1959-1/1964-3/1964-2》

表14 在籍者・年齢(愛知県・三重県)

年齢		12~15	16~19	20~	不明	計	主な史料出所
天神山	1954年度	39	14	7		60	《1954-4》
崇広	1953年度	25	2		1	28	《1953-4》
年齢		~15	16~20	21~		計	主な史料出所
崇広	1954年度	0	8	0		8	《1954-3》

表15 職種(愛知県・三重県)

			主な職種	主な史料出所
天神山	1953年度	男性	工員(14)、徒弟(5)、家事(3)、家業(1)、内職(1) その他(1)	《1954-4》
		女性	工員(18)、徒弟(3)、家事(1)、家業(3)、内職(2) その他(8)	
東港	1955年度	男性	工員(8)、店員(2)、販売人(2)、その他(2)	《1955-2》
		女性	工員(2)、留守子守(8)、店員(1)、給仕(1)	

等が多かったようだ。

第5章 京都府

1955年度以前、京都府には15校の夜間中学校が開設された。《2000-2-23》によれば、1950年5月1日、京都市教育委員会が「二部学級設置」の辞令を出したという⁸³⁾。

【京都市立皆山中学校二部学級】

まず京都市立皆山中学校「二部学級」の開設日は、1950年4月

10日、同年5月1日、同5月10日、同6月1日等、史料によって多様な記載がある⁸⁴⁾。

同校所在地について、後の時期の史料だが《1957-2-29》は「所謂未解放部落人口約8000名があり」、この地区の生徒が二部学級の主体と述べている。また《1963-1-101》も当該地域に未解放部落があり、しかも小企業地域でもあると記す⁸⁵⁾。

同学級の在籍者数は各年度42～78人（表16）⁸⁶⁾、卒業者数は19～28人で推移している（表17）。

生徒の性別は卒業者でみる限り、あまり偏差はない。《1954-8-12》と《1955-10》で1954年度・1955年度の在籍者の性別が確認し得るが、ここでも特に大きな差は見られない。

生徒の年齢・職種等を確認しうる史料は、未入手である。

【京都市立修学院中学校二部学級】

京都市立修学院「二部学級」の開設日は、1950年5月1日⁸⁷⁾だ。

同校所在地について、後の時期の史料だが《1963-1-101》は未解放部落の所在地で、しかも小企業地域でもあると記す。

在籍者数は各年度19～25人⁸⁸⁾、卒業者は概ね2～23人である。

生徒の性別は卒業者からみる限り、若干女性が多い。《1954-8-12》と《1955-8-5》で1954年度・1955年度の在籍者が確認しうるが、やはり女性が若干多い。

生徒の年齢・職種等を確認し得ていない。

【京都市立嘉楽中学校二部学級】

京都市立嘉楽中学校「二部学級」の開設日は、1950年5月1日と同月10日とする史料があるが、1955年以前の史料の多くは10日と記している⁸⁹⁾。

《1954-3-22》は「本校区は西陣機業地にて而も（ママ）小企業家多く、加うるに戦後の不況は中学生徒をして家業を手伝わし生活難を切り抜けんとしつつある」と述べる。また後の時期の史料だが《1975-2-1080》も同学級が「西陣織の家業手伝いなど未解放部落の長欠児対策として」開校したと述べる⁹⁰⁾。

在籍者数は各年度69～91人⁹¹⁾、卒業者数は12～46人である。

生徒の性別は卒業者からみる限り、男性が若干多い。《1954-8-12》《1955-10》《1955-8-5》で1954年度と1955年度の在籍者の性別が確認し得るが、恒常的な偏差は見られない。年齢は確認し得ていない。

生徒の職種は不明だが、前述の地域概況をふまえれば、西陣織関係が少なからず含まれると思われる。

【京都市立藤森中学校二部学級】

京都市立藤森中学校「二部学級」の開設日は、1950年5月6日、同月1日、同10日と史料によって多様な記載がある⁹²⁾。

同学級については、後の時期の史料だが《1975-2-1081》は「未解放部落の不就業児のため、藤森中に1学級と升田隣保会館に1学級開設」と記す。また《2000-2-23》は、1953年度に「二部学級の竹田分校廃止」と記している。

在籍者数は、開設時の1950年度が93人と最も多く、その後は36～78人で推移している⁹³⁾。卒業者は各年度15～26人である。

生徒の性別は、卒業者では顕著な偏差はない。《1954-8-12》《1955-10》《1955-8-5》で1954年度・1955年度の在籍者を見ると、女性が若干多いが、それ以前については不明である。

生徒の年齢・職種等は、管見では確認し得ていない。

【京都市立洛東中学校二部学級】

京都市立洛東中学校「二部学級」の開設日は、1950年5月8日とする史料が多い⁹⁴⁾。

本校所在地について、後の時期の史料だが《1963-1-110》は、代表的な小企業地域と記している。

在籍者数は各年度16～41人⁹⁵⁾、卒業者数は7～25人である。

生徒の性別は、卒業者では顕著な偏差はない。《1954-8-12》《1955-10》《1955-8-5》等で1954年度・1955年度の在籍者の性別が確認し得るが、ここでも傾向的な偏差は見られない。

生徒の年齢・職種等は、確認し得ていない。

【京都市立九条中学校二部学級】

京都市立九条中学校「二部学級」は、1950年5月9日に開設された⁹⁶⁾。

在籍者数は各年度30～42人⁹⁷⁾、卒業者数は10～17人である。

生徒の性別は、卒業者ではさほど偏差はない。《1954-8-12》《1955-10》《1955-8-5》で1954年度・1955年度の在籍者をみると男性が若干多いが、それ以前は不明である。

年齢・職種等を確認しうる史料は、未入手である。

【京都市立西院中学校二部学級】

京都市立西院中学校「二部学級」の開設日も、1950年5月9日⁹⁸⁾とされる。

同校の閉鎖日は史料によって異なるが⁹⁹⁾、《1965-1》はそれを「昭和29年3月31日、生徒減少」によるとしている。確認し得る最後の卒業生は1952年度である。

在籍者数は各年度18～22人、卒業者は3～10人である。

生徒の性別は卒業者でみる限り、女性が多い。年齢・職種は確認し得ていない。

【京都市立烏丸中学校二部学級】

京都市立烏丸中学校「二部学級」は、1950年5月10日¹⁰⁰⁾に開設された。なお《2000-2-23》は「紫野（後に烏丸中に移る）」と記す。京都市立紫野中学校は、1951年に烏丸中と嘉楽中に分割統合された。二部学級の開設が1950年だったことをふまえれば、学級が開設されたのは紫野中学校だった可能性も否定し得ない。

在籍者数は各年度27～43人¹⁰¹⁾、卒業者数は12～21人で推移している。

生徒の性別は卒業者でみる限り、総じて女性が多い。《1954-8-12》《1955-10》《1955-8-5》で1954年度・1955年度の在籍者が確認し得るが、やはり女性が男性の約2倍と多い。生徒の年齢・職種は確認し得ていない。

【京都市立北野中学校二部学級】

京都市立北野中学校「二部学級」も、1950年5月10日に開設さ

れた¹⁰²⁾。

在籍者数は1950年度は72人と多いが、翌年度から27～43人と概ね半減している¹⁰³⁾。卒業者数も1950年度が34人と最も多く、翌年度からは各年度14～20人である。

生徒の性別は卒業者でみる限り、顕著な偏差はない。《1954-8-12》《1955-10》《1955-8-5》で1954年度・1955年度の在籍者をみても男女の偏差は小さい。生徒の年齢・職種は確認し得ない。

【京都市立近衛中学校二部学級】

京都市立近衛中学校「二部学級」も、1950年5月10日に開設された¹⁰⁴⁾。

同学級は、《1975-2-1081》によれば、「約20名で発足」した。在籍者数は各年度概ね23～35人、卒業者は7～17人である。

生徒の性別は、卒業者では顕著な偏差はない。《1954-8-12》《1955-10》《1955-8-5》によれば、1954年度・1955年度の在籍者は若干女性が多いが、それ以前については確認し得ていない。

生徒の年齢・職種等も確認し得る史料は未入手である。

【京都市立山科中学校二部学級】

京都市立山科中学校「二部学級」は、1950年5月18日に開設された¹⁰⁵⁾。

在籍者数は各年度15～37人¹⁰⁶⁾、卒業者数は6～16人で、いずれも1954年度以降、減少傾向にある。

生徒の性別は卒業者でみる限り、1951年度以降、若干女性が多い。《1954-8-12》《1955-10》《1955-8-5》で1954年度・1955年度の在籍者を見ても、女性が男性の3～4倍と多い。

生徒の年齢・職種は管見では確認し得ない。

【京都市立朱雀中学校二部学級】

京都市立朱雀中学校「二部学級」の開設日についてはいくつかの異なる記載があるが、1955年以前の史料の多くは1950年10月2日と記している¹⁰⁷⁾。

在籍者数は各年度25～43人である¹⁰⁸⁾。卒業者は1950年度は4人とどまるが、その後は各年度12～24人を送り出している。

生徒の性別は、卒業者では顕著な偏差はない。《1954-8-12》《1955-10》《1955-8-5》で1954年度・1955年度の在籍者をみても、年度によって差はあるが、恒常的傾向は見られない。

生徒の年齢・職種は確認し得ていない。

【京都市立陶化中学校二部学級】

京都市立陶化中学校「二部学級」は、1951年10月8日に開設された¹⁰⁹⁾。

在籍者数は各年度23～34人、卒業者は7～13人であった。

生徒の性別は卒業者から見る限り、特に偏差はない。《1954-8-12》《1955-10》《1955-8-5》で1954年度・1955年度の在籍者を見ると、女性が男性の2～3倍と多いが、これが恒常的な傾向か否かは不明である。

生徒の年齢・職種等は確認し得ていない。

表16 在籍者（京都府）

年度	1950	1951	1952	1953	1954	1955	主な史料出所
皆山	42	49	64	78	63	54	《1977-1-58》
修学院	25	24	20	20	19	21	
藤森	93	58	78	36	36	46	
嘉楽	91	80	94	70	78	69	
九条	39	36	42	35	30	30	
洛東	16	38	41	20	19	25	
西院	22	22	18				
烏丸	28	32	43	43	41	27	
北野	72	43	31	32	34	27	
近衛	13	29	30	33	35	23	
	43	29	30	20	35	23	《2000-2-47》
山科	37	22	28	24	17	15	《1977-1-58》
朱雀	25	37	43	35	32	30	
陶化		34	31	25	23	28	
		24	31	33	23	28	《2000-2-47》
高野		43	36	23	35	23	《1977-1-58》
弥栄					24	31	《1977-1-58》

表17 卒業者・性別（京都府）

年度		1950	1951	1952	1953	1954	1955	主な史料出所
皆山	男性	9	12	13	17	9	14	《1961-1-7》
	女性	12	11	8	9	10	14	
	計	21	23	21	26	19	28	
	修学院	男性	7	11	13	14	9	14
女性		13	11	8	8	10	14	
計		20	22	21	22	19	28	
修学院		男性	2	0	9	4	1	3
	女性	1	5	14	6	2	4	
	計	3	5	23	10	3	17	
	修学院	男性	2	0	5	2	1	1
女性		1	5	9	4	1	3	
計		3	5	14	6	2	4	
嘉楽		男性	8	18	28	16	13	22
	女性	4	6	18	8	17	16	
	計	12	24	46	24	30	38	
藤森	男性	11	10	17	11	6	7	
	女性	14	16	12	6	9	12	
	計	25	26	29	17	15	19	
洛東	男性	3	9	8	7	1	7	
	女性	4	3	17	4	7	7	
	計	7	12	25	11	8	14	
九条	男性	4	2	6	11	5	10	
	女性	6	10	9	6	5	5	
	計	10	12	15	17	10	15	
西院	男性	1	1	3				《1954-8-11/1955-8-3》
	女性	2	9	6				
	計	3	10	9				
烏丸	男性	9	5	6	8	7	2	《1954-8-11/1956-1-4/1955-8-3》（注2）
	女性	8	15	13	13	14	10	
	計	17	20	19	21	21	12	
北野	男性	19	10	10	8	8	9	《1954-8-11/1956-1-4/1955-8-3》
	女性	15	10	6	8	6	6	
	計	34	20	16	16	14	15	
近衛	男性	7	2	5	2	9	6	
	女性	3	6	7	5	8	4	
	計	10	8	12	7	17	10	
山科	男性	6	5	4	2	3	1	
	女性	5	6	9	14	3	5	
	計	11	11	13	16	6	6	
朱雀	男性	1	7	10	7	7	6	
	女性	3	7	14	10	6	6	
	計	4	14	24	17	13	12	
陶化	男性		7	5	1	3	7	
	女性		6	7	7	4	5	
	計		13	12	8	7	12	

高野	男性		-	4	7	12	3
	女性		3	6	7	6	6
	計		3	10	14	18	9
弥栄	男性				1	0	3
	女性				0	6	7
	計				1	6	10

(注1) 一部の元史料で男女別の計が不一致。

(注2) 1951年度、男性15人、女性15人とする史料も多いが、その場合も計は20人。

【京都市立高野中学校二部学級】

京都市立高野中学校「二部学級」は、1951年10月25日に開設された¹¹⁰⁾。

同校所在地について、後の時期の史料だが《1963-1-101》は未解放部落の所在地で、しかも小企業地域でもあると記している。

在籍者数は各年度23～43人¹¹¹⁾。卒業者数は初年度を除けば、各年度9～18人である。

生徒の性別は、卒業者で見ると、あまり偏差はない。《1954-8-12》《1955-10》《1955-8-5》で1954年度・1955年度の在籍者を見ても、傾向的な偏差は見られない。

年齢・職種等を確認しうる史料は未入手である。

【京都市立弥栄中学校二部学級】

京都市立弥栄中学校「二部学級」の開設日は、1953年9月1日とする史料が多い¹¹²⁾。

在籍者数は、《1975-2-1090》によれば開設時の1953年度は10人だった¹¹³⁾。しかし、1954年度以降は24～31人と増加している。卒業者数は1953年度は1人だったが、これも翌年度以降、6～10人に増加している。

生徒の性別は、卒業者では初年度を除き、女性が多い。《1954-8-12》《1955-10》《1955-8-5》で1954年度・1955年度の在籍者を見ても、女性が男性の約4～5倍と多い。

年齢・職種等は、確認し得ない。ただし後の時期の史料だが《1965-1》には「祇園のお茶屋からの登校生徒」との記載がある。

第6章 大阪府

1955年以前、大阪府には10の夜間中学校が誕生した。

【大阪市立生野第二中学校(勝山中学校)夕間学級】

まず大阪市立生野第二中学校「夕間学級」¹¹⁴⁾だ。《1971-2-22》は、開設当時の教務主任であった吉井武千代氏の「当時は電力事情が悪く、毎夜のごとく停電するという状態であったので、授業は夕刻行い、われわれはこれを夕間学級と呼んでいた」との言葉を記している。

同学級は、1947年10月1日に授業を開始した¹¹⁵⁾。なお1949年5月1日、生野第二中学校は勝山中学校と校名変更した。

そして1950年7月20日、「夕間学級」は閉鎖された¹¹⁶⁾。《1947-1》には、「昭和二十五年七月二十日 在学生の通学区域が校下でなくなった為に本校の取扱外となり夕間学級を廃止する」との記載がある。ただし後の時期の史料だが《1971-4》は、この記載の引用後、「実際は二学期の当初も続けられていたもようで、廃止

のやむなきに至ったのも、大阪市教育委員会や文部省当局の無理解によるところが多かったということである。当時この学級を担当していた先生の話によると、『たしか10月ごろ(秋であったと記憶している)だったと思いますが、ある日、教育委員会から呼び出しを受けましたので、…(中略)…出かけたところ、文部省からの係官も来ていまして、思いもかけず、えらいおこられましたね。…(中略)…出席簿も学籍簿もみんな取り上げられてしまいましたね。』というような事実があり、以後、夕間学級は廃止されたようである」と述べている¹¹⁷⁾。

在籍者数は、《1947-1》に1949年4月1日時点で43人との記載がある。卒業者数は《1947-1》に「昭和二十三年三月二十四日…(中略)…夕間学級修了者一四名」と記されている。

生徒の性別は、《1947-1》で1949年度の在籍者を見る限り、男性が20人、女性が23人で大きな偏差はない。年齢は、管見では確認し得ていない。

生徒の職種も統計的史料は未入手である。ただし『毎日新聞』(1947年10月17日、大阪市内版)に「タバコ売りや靴みがき、工員になって働き、学校に通学する時間のない子供たち」のための学級との記事がある¹¹⁸⁾。また《1978-1》は「学校を休んでガラス工場などへ働きに行っている生徒」とも記す。零細企業での製造工、または都市雑業層が多かったと考えられる。

【大阪市立東陽中学校補習授業】

大阪市立東陽中学校には、後の時期の史料での名称だが「補習授業」があった¹¹⁹⁾。開設日は、1949年4月1日、及び、1947年から開設されていたとする史料がある¹²⁰⁾。また閉鎖日についても、1951年3月31日、及び、1949年とする史料がある。

生徒の人数・属性等は、確認し得る史料を入手し得ていない。

【大阪市立玉津中学校夕間学級(夜間補習)】

大阪市立玉津中学校には、いずれも後の時期の史料での名称だが「夕間学級(夜間補習)」・「補習授業」¹²¹⁾があった。

開設日は1949年10月1日¹²²⁾とされ、《1971-4》はこの日を「開講日」と記す。

所在地について、《1971-4》《1971-2-23》は「長欠生の88パーセントは家計困難なるため或は工場に働き、日雇労働に服し、或は働く家族のために留守番、子守等をやり、勉学の意思をもちつつその機会が与えられておらない」と述べている。

同学級は、1952年3月31日に閉鎖された。《1971-4》は、閉鎖理由を「入級する生徒に学齢超過者が多くなってきて、玉津中学在籍の長欠生救済という目的が次第にぼやけてしまったということにあったらしい」と述べる。《1971-2-24》はこれに加え、「当局の無理解による圧迫が大きな原因としてあったようである」とも記す¹²³⁾。

在籍者数は、《1971-4》によれば、「昭和24年10月3日、第一回授業 生徒13名(男10、女3)、10月28日 生徒22名」である。その後、在学者は30～41人で推移した(表18)。また《1971-4》は、「20名ほどの卒業生が送りだされたようで…(中略)…ただ、この卒業については、正式には教育委員会の認可がないため、昼間の生徒として卒業生台帳の一ページにつけ加えられたものであ

る」と記している。

生徒の年齢・職種等は、管見では確認し得ていない。ただし前述の閉鎖理由をふまえれば、1951年度には年齢超過者が増加していたと思われる。また所在地域の特徴から、生徒の多くが零細企業での製造工、または都市雑業層であったと推定し得る。

【堺市立大浜中学校二部授業】

堺市立大浜中学校「二部授業」の開設日は、1950年7月1日、1952年5月、1951年4月20日等、史料によって多様な記載がある¹²⁴⁾。

在籍者数は各年度26～62人で、概ね年度を追う毎に増加している¹²⁵⁾。卒業者は、各年度2～7人である(表19)。

生徒の性別は卒業者についてのみ確認しうるが、顕著な偏差は見られない。年齢・職種は確認し得ていない。

【豊中市立第一中学校補習教室】

豊中市立第一中学校には「補習教室」¹²⁶⁾が開設された。ただし後の時期の史料だが《1971-2-27》は、「豊中市においては、市立の各中学校に在籍する不就学、長欠の生徒を一箇所(第一中学校)にあつめて指導した」とし、「豊中市中学校補習教室」と称している。開設日は、1951年1月16日とする史料が多い¹²⁷⁾。

在籍者数は1950年度に63人と最も多かったが、その後は22～32人ととどまる¹²⁸⁾。卒業者も1950年度が20人と最も多く、その後は2～15人である。

生徒の性別は卒業者についてのみ確認し得るが、顕著な偏差は見られない。年齢・職種等は、確認し得ていない。

【布施市立第四中学校特別課外指導】

布施市立第四中学校には、いずれも後の時期の史料で確認し得る名称だが、「特別課外指導」¹²⁹⁾が設置された。

開設日は、1949年の「第二学期」・9月、1948年(月日記載なし)、1953年12月1日等、史料によって相違がある¹³⁰⁾。

《1971-2-25》は、同校開設当時の生徒数を「約15名」、「昭和27～8年度は約50名」と述べる。また《1954-3-13》は1953年度の在籍者数を30人と記している。

生徒の性別・年齢・職種等は、確認し得ていない。

【岸和田市立岸城中学校補導学級】

岸和田市には、4つの夜間中学校の存在が確認し得た。

その一つは、いずれも後の時期の史料での名称だが、岸和田市立岸城中学校「補導学級」または「夜間補導学級」¹³¹⁾だ。

《1969-2-35》は、「補導学級(夜間学級)は岸和田市内各中学校に一学級ずつ発足した」と述べ、ただし「その後数年のうちに、岸和田市内における夜間学級は、不就学対策の浸透とともに次第に姿を消し、本校(岸城中学校:筆者注)のみが残存した」と記している。また《1966-2-12》は「昭和29年岸和田港建設のため多くの労働者が流入してきた。そして、そこに多くの長欠生徒を生んだ」とも記す。

開設日は史料によって、1952年4月1日、同年4月25日、1953年4月1日、同年4月8日、1954年4月1日等、多様な記載があ

表18 在籍者(大阪府)

年度	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	主な史料出所
玉津	31	41	30					《1971-2-24/1971-4》
大浜		31	26	40	47	60	62	《1971-2-27》
豊中		63	32	20	22	27	23	《1971-2-28》
岸城						45	46	《1971-2-20・29》
春木						35	32	《1971-2-20》

表19 卒業者・性別(大阪府)

年度		1950	1951	1952	1953	1954	1955	主な史料出所
大浜	男性	0	0	4	3	3	3	《1971-2-27》
	女性	0	2	3	2	3	1	
	計	0	2	7	5	6	4	
豊中	男性	13	8	6	0	3	4	《1971-2-28》
	女性	7	7	8	2	3	3	
	計	20	15	14	2	5	7	
岸城	計					28	17	《1966-2》
春木	計					5	0	《1971-2-20》

る¹³²⁾。

在籍者数は1954年度以降、各年度45～46人、卒業者は17～28人であった。

生徒の性別・年齢・職種等について統計的史料は入手し得ていない。ただし《1969-2-35～36》は年度は明示していないが年齢を「17～18才程度」と述べ、その一方で「昭和27年以来昭和41年3月までは、…(中略)…在学、入学する生徒は12～14歳の学年齢者に限られていた」とも記す。《1971-2-29》も、在籍者はすべて学齢者だったと記している。

【岸和田市立光陽中学校補導学級】

岸和田市立光陽中学校「補導学級」¹³³⁾の開設日は、1954年4月1日とされる¹³⁴⁾。

ここは、《1971-2-28》によれば、「1年足らず」で閉鎖された。《1976-3》は閉鎖日を1955年3月31日と記す。

生徒の人数・性別・年齢・職種等は、確認し得ていない。

【岸和田市立春木中学校補導学級】

岸和田市立春木中学校「補導学級」¹³⁵⁾は、1954年4月1日に開設された¹³⁶⁾。

在籍者数は各年度32～35人、卒業者数は初年度に5人である。

生徒の性別・年齢・職種は確認し得ていない。

【岸和田市立久米田中学校補導学級】

岸和田市立久米田中学校「補導学級」¹³⁷⁾は、1954年4月1日に開設された¹³⁸⁾。

生徒の人数・性別・年齢・職種等は確認し得ていない。

第7章 奈良県

奈良県については従来、4校の夜間中学校の存在が確認されてきた。しかし近年、横関理恵氏の《2017-1》により、1955年度以前に少なくとも8校以上が存在したことが明らかにされた。

【奈良市立若草中学校東之阪地区養護学級】

奈良市立若草中学校には、《2017-1-19》によれば、「東之阪地区養護学級」という名称の夜間学級が、1950年7月10日に開設された¹³⁹⁾。開設場所は、若草保育園内である。

後の時期の史料だが《1965-1》は、「同和地区の貧困生徒救済」のための学級で、「開校後2年位で閉校」されたと記す。

在籍者数は、《1954-3-14》によれば、1953年度は44人である。生徒の性別・年齢・職種等は1955年度以前については確認し得ていない。

【奈良市立東市中学校夜間特別授業】

奈良市立東市中学校「夜間特別授業」¹⁴⁰⁾の開設日は、《1975-2-1085》によれば、1951年12月2日である。《1954-11》によれば「二十六年 父兄の第一次啓蒙と公民館利用」とあり、開設場所が公民館であったことが窺える。《2017-1-18》も、「古市町公共集会所内」と記す。

また《1954-11》は、同校が同和問題に根差す長欠対策として設置されたと述べる。閉鎖年度は、明らかではない¹⁴¹⁾。

在籍者数は、《1954-3-14》が、1953年度のそれを17人と記す。生徒の性別・年齢・職種等は、確認し得ていない。

【鴨公村立鴨公村中学校夜間学級】

高市郡の鴨公村立鴨公村中学校は、1952年10月1日¹⁴²⁾、同和地区に位置する「飛弾浴場付集会所」¹⁴³⁾において「夜間学級」を開設した。

閉鎖年については、1955年とする史料がある¹⁴⁴⁾。

所在地域について《1954-3-14》は、「製靴業が盛んになりかけ、小手間を使えば能率が3倍位になり収入が上がるので中学生を使い、不就学生が多かった」と述べる。

在籍者数は、《1954-3-14》によれば、1953年度は37人である。

生徒の性別・年齢は、確認し得ていない。職種も不明だが、前述の地域概況からみると、製靴業の存在は推定しうる。

【安堵村立安堵中学校特設学級】

生駒郡の安堵村立安堵中学校には、後の時期の史料による名称だが、東安堵公民館で「特設学級」が設立された¹⁴⁵⁾。

開設日は、1954年4月1日、及び、1958年5月とする史料がある¹⁴⁶⁾。1955年以前の生徒数、生徒の性別・年齢・職種等は、確認し得ていない。

【奈良県のその他の夜間中学校】

《2017-1》は、上記以外にも多数の夜間中学校が奈良県に存在していたことを明らかにした。

①北葛城郡の箸尾町立箸尾中学校。開設日は1950年1月16日、同日の生徒数は7名であった¹⁴⁷⁾。

②北葛城郡の河合村立河合中学校「夜間学級」。開設日は1955年3月（日付不明）、開設場所は「寺、浴場内」とされる¹⁴⁸⁾。後の時期の史料だが《1957-5-33》は「西ナグラ地区三年生を対象として、地区の小屋や学校で」続けられてきたと記している。また《2017-1-20~21》は、部落差別事件に対する抗議運動の成果

として同夜間学級の設置に至った経過を明らかにし、同地域の貧困な不就学生徒が「野球のグローブやバスケットボール製造の見習工」として働いていたと記す¹⁴⁹⁾。

③宇陀郡の大字陀町立大字陀中学校。開設日は1952年4月（日付不明）、開設場所は「岩谷会館」で、「彌栄分校」との名称が見られる¹⁵⁰⁾。

④平群郡の三郷村立三郷中学校。開設日は1955年9月（日付不明）¹⁵¹⁾、開設場所・生徒数・生徒の属性等は不明である。

さらに《2017-1-18》は、開設日が1955年以前か否かも含めて未確認の夜間中学校として、下記の存在も紹介している¹⁵²⁾。

⑤南葛城郡の御所町立掖上中学校。なお掖上村は1955年2月に御所町に編入され、御所町は1958年に御所市となっている。同学級が御所町立であれば、この期間中に開設されたと思われる。

⑥磯城郡の川東村立式下中学校。なお磯部郡の式上中学校との記述もあるが、川東村は磯城郡である。川東村は1956年9月30日に合併により消滅している。同学級が川東村立であれば、同日以前に開設されていたと思われる。

⑦生駒郡の平群村立平群中学校。

⑧奈良市立都南中学校。

第8章 和歌山県

1955年以前、和歌山県には11校の夜間中学校が確認し得る。

その実態は、公立中学校との関係も含め、未解明の点が多い。そうした中で、松崎運之助氏の《1979-2-67~72》、及び、江口怜氏の《2015-1》は貴重な論稿である。

【新宮市立城南中学校夜間学級】

新宮市立城南中学校「夜間学級」¹⁵³⁾は、新宮市の春日町青年会館¹⁵⁴⁾で開設された。開設日は、1952年4月8日、及び、同年9月とする史料がある¹⁵⁵⁾。

同学級は、《1954-15》によれば「同和教育のための夜間学級」である。また《1975-2-1086》によれば、1955年頃、「長期欠席生徒がなくなった為」に閉鎖されたが、その後も「地区の基礎学力充実のために目的をかえ週一回続けてい」という。

在籍者数は、《1954-3-15》によれば1953年度が49人、《1954-15》によれば1954年度が50人（男性30人、女性20人）である。

生徒の性別・年齢を示す統計的史料は入手し得ていないが、《1954-15》は「当初は小学生や乳児を守った婦女子も交え、喧々たる集いであつたが…（中略）…開設後九ヶ月について漸く学習意欲が見られ初め（ママ）会場の狭隘から中学生のみを取り上げて行うことになった」と記している。

生徒の職種等は確認し得ていない。

【新宮市立緑ヶ丘中学校野田夜間学級・蘭之沢夜間学級】

新宮市立緑ヶ丘中学校には、後の時期の史料の記載だが、野田町の野田青年会館に「野田夜間学級」、蘭之沢町の蘭之沢青年会館に「蘭之沢夜間学級」の2カ所が、いずれも1952年9月1日、または10月に開設された¹⁵⁶⁾。《1954-3-27》は開設理由を「未解放部落の低位性向上のため」と記す。

また《1975-2-1086》は、「長期欠席生徒がなくなった為」、1955

年頃に閉鎖されたが、「地区の基礎学力充実のために目的をかえ週一回続けてい」たと記している。

在籍者数は《1975-2-1091》によれば、1953年度で12人、卒業者は総計約40人である。

生徒の性別・年齢・職種等は、確認し得ていない。

【御坊町立御坊中学校菌地区夜間学級・鳥地区夜間学級】

日高郡の御坊町立御坊中学校では、《1954-3-15・27》によれば「未解放部落の低位性向上のため」、1952年8月1日に「鳥地区」と「首地区」にそれぞれ夜間学級が開設された。後の時期の史料だが《1975-2-1985》は、菌公民館分館で「菌地区夜間学級」、鳥東正会場で「鳥地区夜間学級」が開設されたと記している。

閉鎖は《2000-1-112》《2004-1-112》によれば、1955年である。

《1954-3-15》は、1953年度の在籍者数を151人（2カ所計）と記す。生徒の性別・年齢・職種等は確認し得ていない。

【切目村立切目中学校（名称不明）】

日高郡の切目村立切目中学校には、名称は確認し得ていないが、夜間学級が開設された。

《1954-3-17》は、開設日を1953年4月7日と記す。また《1976-1-2》《1976-3》は、1955年3月31日に閉鎖されたと記している。《2015-1-105》は、同学級が切目文化会館で開講され、「中学校主体の夜間学級が先行し、後に子ども会の学習会へ移行か」と述べている。

在籍者数は、《1954-3-17》によれば、1953年度で17人である。生徒の性別・年齢・職種等は、確認し得ていない。

【日置町立日置中学校坂本地区夜間学級】

西牟婁郡の日置町立日置中学校では、《1954-3-15》によれば、坂本隣保館において「坂本地区夜間学級」が、1952年6月10日に開設された。《2015-1-104～105》は、青年会館において「地域の青年有志による夜学級中心の子ども会活動が52年頃から開始し、53年頃には有志教員の協力あり」と述べている。

同学級は《1975-2-1086》によれば、1954年3月には閉鎖されたが、その後、「同和地区子供会へ発展していった」という。

《1954-3-27》は、「積善教育（同和）実践の一活動として」開設されたとする。《1975-2-1087》も当該地域では「同和地区の不就学生徒が多く、…（中略）…生徒たちは日かせぎの仕事」に出ていたと述べる。

在籍者数は、《1954-3-15》によれば、1953年度で6人である。生徒の性別・年齢・職種等は確認し得ていない。

【本宮村立本宮村中学校補習学級（若葉子供会）】

東牟婁郡の本宮村立本宮村中学校には、後の時期の史料に記載された名称だが「補習学級（若葉子供会）」が開設された¹⁵⁷。開設日は、1952年4月1日¹⁵⁸である。《2015-1-104～105》は、「地域の青年有志により52年に寺で子ども会の夜間学習会の活動開始、53年に子ども会会館へ移動。この頃既に小中学校教師の協力あり」と記している。

《2000-1-112》《2004-1-112》は1955年に閉鎖されたと記すが、

《1975-2-1086》は「子供会活動は現在（1975年時点：筆者注）も続けられている」と述べている。

当該地域について、《1975-2-1086》は「同和地区、子供会活動として開設」されたと記す。

在籍者数は、《1954-3-15》によれば、1953年度で12人である。生徒の性別・年齢・職種等は確認し得ていない。

【西向町立西向中学校（名称不明）】

東牟婁郡の西向町立西向中学校にも、名称は確認し得ていないが、夜間学級が開設された。

《2015-1-104～105》は、同学級が隣保館において「51年には子ども会の学習会開始して」と述べる。

《1954-3-15》は、開設日を1952年4月1日と記す。《2000-1-112》《2004-1-112》は、1955年に閉鎖されたと記すが、《1975-2-1086》は「いつの頃か分かりませんが廃止届けを出して現在（1975年時点：筆者注）は同和対策として古座町が実施」としている。なお西向町は、1956年3月30日の合併で古座町となった。

在籍者数は、《1954-3-15》によれば、1953年度で32人である。生徒の性別・年齢・職種等は確認し得ていない。

【東野上町立野上中学校夜間学級】

海草郡東野上町立野上中学校には、後の時期の史料での名称だが「夜間学級」¹⁵⁹が開設された。なお東野上町は1955年4月1日、合併を経て野上町と改称された。

開設日は、1950年4月頃、1952年4月1日、同年9月1日等、史料によって多様な記載がある¹⁶⁰。

《2015-1-104～105》は、「中学校主体の夜間学級が50年4月から54年4月まで開設。55年に中学生対象の子ども会が開設（夜間学級の発展的解消?）」と記している。《1975-2-1087》も同学級が「1954年4月頃」に閉鎖され、「同和対策の子供会が発足移換された。経済の好転などで不就学生徒減少」と記す。なお《2000-1-112》《2004-1-115》は、閉鎖年を1955年としている。

《1954-3-15》によれば1953年度の在籍者数は14人、《1975-2-1086》によれば卒業者は総計20人である。

生徒の性別・年齢・職種等は確認し得ていない。

【安原村立安原中学校夜間学級】

海草郡の安原村立安原中学校にも、《1954-3-15》によれば、「夜間学級」が1953年9月1日に開設された。《1975-2-1087》によれば、開設場所は本渡公民館であり、「約半年位継続され、参加者が減り、担当者が病氣入院したため」、1954年3月に閉鎖されたという。《2000-1-112》《2004-1-112》は、閉鎖年を1955年とする。

《2015-1-104～105》は、「1953年4月21日、本渡西専寺に於て夜間学級開校式」が行われ、「子ども会の夜学と中学校主体の夜間学級が並行して実施か。中学校の夜間学級の解消時期は不明」と記す。

《1954-3-15》によれば在籍者数は1953年度で32人、《1975-2-1087》によれば卒業者はいなかったとのことである。

生徒の性別・年齢・職種等は確認し得ていない。

【南部町立南部中学校（名称不明）】

日高郡の南部町立南部中学校の夜間学級を紹介しているのは、管見では《2015-1》のみである。それによれば、1954年度、青年会場で開設され、「教師のボランティアによる学習会が49年頃始まり、52年以降地域住民主体の子ども会へ移行。後に正式に学校教師の派遣開始」とある。

生徒の人数・属性・職業等は確認し得る史料は未入手である。

【南富田村外三ヶ村学校組合立富田中学校（名称不明）】

西牟婁郡の南富田村外三ヶ村学校組合立富田中学校の夜間学級を紹介しているのも、《2015-1》のみである。それによれば、「地域住民・子ども主体の子ども会活動（朝顔会）が48年頃始まり、51年運営主体が東富田村人権尊重委員会に移って小・中学校教師が学習指導を担当するようになる」。会場は寺から共同作業場に移ったと記されている。

生徒の人数・属性・職業等は確認し得ていない。

【補注】

- 1) 《2014-1-158》。
- 2) 《1953-2》《1954-13》《1954-14》《1955-1》等。《1979-2-92～97》も参照。
- 3) 《1951-4-2》《1953-2-3》《1954-13-11》《1955-1-15》。《2001-4-216》も参照。
- 4) 《1951-1》《1951-4》《1953-2》《1954-12》《1954-13》《1954-14》《1955-1-2》等。
- 5) 《1951-4-5》《1955-1-2》《1953-2》《1954-12》《1954-13》等。
- 6) 一部に5人とする史料（《1953-2-6》等）もある。
- 7) 単年度内の在籍者数は、《1955-1-3・4》《1954-13》《1964-6-7》《1964-3》《1954-12》《1953-2》《1954-3-11》《1955-5-7》《1953-2》《1951-1-10》《1951-4-10》等。
- 8) 《1970-4-55》《1964-6-7》も参照。
- 9) 表9には「外で働いている者」の総計の5%以上の職種を掲載。《1954-14-15》《1991-1-15》等も参照。
- 10) 《1955-3》等。
- 11) 《1957-3-5》《1954-3-11》《1955-5-6》等。
- 12) 《1955-3-4》。ただし《1964-6-8》では37人。
- 13) 単年度の在籍者数は、《1954-3-11》《1955-5-7》等も参照。
- 14) 表9には、複数の生徒が就労する職種（人数）を記載。
- 15) 《1954-5》《1955-6》。
- 16) 《1955-5-6》等。
- 17) 《1955-6-3～4》《1965-1》《1979-2-98》も参照。
- 18) 《1964-6-25》は1952年4月1日の生徒数を8人と記す。
- 19) 単年度の在籍者数は《1955-5-7》《1964-6-25》《1975-2-1091》等。
- 20) 表9の（ ）は人数。（ ）内の記載がないものは1人。
- 21) 《1954-3-11》《1955-5-6》《1955-7》。なお《1973-1-15》は「昭和28年4月8日だ、と思う。物置のような所を板張りした教室で開設式が行われた」と記す。
- 22) 《1982-2-3》は6人、《1986-1-7》は4人と記す。

- 23) 単年度の在籍者数は、《1954-3-11》《1955-5-7》《1975-2-1090》《1983-1-12》等も参照。
- 24) 《1953-1》《1954-1》《1955-13》。
- 25) 1日が《1954-3-11》《1955-5-6》《1955-13》《1964-7》《1964-8》等、10日が《1958-1-54》等。
- 26) 《1969-2-32》も参照。曳舟中学校に夜間中学校が併設された理由は《1998-1-102》《1998-2-4》等。
- 27) 《1962-2-16・69》《1964-6》《1986-1》《1993-1-3》《1998-1-97・103》《1998-2-5》等。
- 28) 単年度の在籍者数は《1953-1》《1954-3-11》《1955-5-7》《1955-13》も参照。
- 29) 単年度の性別は、《1953-1》《1998-1-104》等も参照。
- 30) 単年度の年齢は、《1962-2-70》《1992-1-22》《1998-1-102・103》《1998-2-5》等。
- 31) 《1954-3-11》《1955-5-6》《1955-11-3》《1964-4-1》。
- 32) 《1964-5》も参照。
- 33) 《1955-11》。ただし《1992-1-23》は「27名で発足」と記す。
- 34) 単年度の在籍者数は、《1954-3-11》《1955-5-7》《1955-11-6》《1964-3》《1992-1-23》等も参照。
- 35) 単年度の卒業者数は、《1964-3》《1962-1》《1964-5》《1964-6-74》《1967-3-20》等を参照。
- 36) 《1971-3-29》も参照。
- 37) 表9では、全体の5%以上の職種を記載。（ ）内は人数。
- 38) 《1955-9》。
- 39) 《1955-5-6》《1967-1-1》《1967-2-2》。
- 40) 《1984-1-37》も参照。
- 41) 《1984-1-37・46》等も参照
- 42) 単年度の在籍者数は《1994-1-43》《1955-9》《1955-5-7》も参照。
- 43) 単年度の性別は《1955-9》も参照。
- 44) 《1971-1-17～18》《1971-2-211～212》。1947年2月4日（《1976-2》）等の記載もある。
- 45) 《1966-2-9》《1979-2-48～52》も参照。
- 46) 《1963-1-10》《1957-3-5》《1954-3-11》《1974-1》等。
- 47) 《1968-1-A12》。
- 48) 《1971-3-10》には「夜間特設学級」との表記もある。
- 49) それぞれ《1954-3-11》、《1965-2-6》、《1968-1-9》、《1965-1》等。
- 50) それぞれ《1980-1-109～110》、《1954-3-11》等。
- 51) それぞれ《1969-2-101》、《1954-3-11》、《1957-3-5》、《1970-1-C5》等。
- 52) 《1955-4》等も参照。
- 53) それぞれ《1954-3-11》、《1980-1-109～110》等。
- 54) 《1975-2-1079》に「夜間部」との表記もある。
- 55) それぞれ《1957-3-5》、《1954-3-11》、《1965-2-6》。《1965-1-5》は1949年4月1日と記す。
- 56) 《1975-2-1079》に「特設学級」との表記もある。
- 57) それぞれ《1965-1》《1954-3-11》等。
- 58) 《1965-1》には「金沢中学と併合」とあるが、金沢中学校の二部学級開設は1956年6月1日とも記されている。

- 59) 《1975-2-1079》に「特設学級」との表記もある。
- 60) 《1975-2-1079》。
- 61) 《1975-2-1079》に、「夜間学級」の表記もある。
- 62) それぞれ《1954-3-12》、《1975-2-1079》《1976-3》等。
- 63) それぞれ《1965-1》《1954-3-11》等。
- 64) 《1975-2-1079》。
- 65) それぞれ《1957-3-5》、《1975-2-1079》、《1954-3-12》《1975-2-1090》、《1965-1》等。
- 66) 《1975-2-1079》。
- 67) それぞれ《1959-2》、《1954-3-12》等。
- 68) 《1954-4》。
- 69) それぞれ《1954-3-12》、《1964-3》、《1975-2-1079》等。
- 70) 単年度の在籍者数は《1954-4》《1954-3-12》も参照。
- 71) 単年度の性別は《1954-4》も参照。
- 72) 《1955-2》。《1975-2-1079》にも「二部学級」の名称がある。
- 73) 《1954-3-12》《1955-2》。なお《1965-2-6》は10日、《1976-3》は16日と記す。
- 74) 単年度の在籍者数は《1955-2》、卒業者数は《1954-3-12》も参照。
- 75) 単年度の性別は《1955-2》も参照。
- 76) 《1954-2》
- 77) 《1951-2》《1951-3》《1954-7》。
- 78) それぞれ《1951-2》、《1951-3》、《1954-2》等。《1957-3-5》等には1949年9月15日との記載もある。
- 79) 《1966-3-77》も同一の記載である。
- 80) 単年度の在籍者数は、《1951-2》《1951-3》《1954-7》《1954-2》《1954-6》等も参照。
- 81) 単年度の卒業者数は《1954-2》も参照。
- 82) 単年度の性別は《1951-3》《1954-7》等。
- 83) 京都市の夜間中学校所在地の全体的特徴、及び、生徒の職種については、《1954-8-14・19》《1955-8-40》を参照。京都市の夜間中学校については、《2013-2》も参照。
- 84) それぞれ《1957-3-5》、《1954-8-10》《1955-10》《1955-8-2》、《1954-3-13》、《1961-1-7》。ただし《1961-1-7》には「五月頃」との回顧記録もある。
- 85) 《1967-4-69》も参照。
- 86) 単年度の在籍者数は《1954-3-13》《1955-10》《1955-8-3》《1964-3》も参照。
- 87) 《1954-8-10》《1954-3-12》《1955-10》《1955-8-2》。
- 88) 単年度の在籍者数は《1954-3-12》《1955-10》《1955-8-5》も参照。
- 89) 《1954-8-10》《1954-3-12》《1955-10》《1955-8-2》等。
- 90) 《1967-4-69》も参照。
- 91) 単年度の在籍者数は《1954-3-12》《1955-10》《1955-8-5》《1964-3-2》も参照。
- 92) それぞれ《1954-8-10》、《1955-10》、《1955-8-2》、《1966-4-9》、《1954-3-12》等。
- 93) 単年度の在籍者数は《1954-3-12》《1955-10》《1955-8-5》も参照。
- 94) 《1954-8-11》《1954-3-12》《1955-10》《1955-8-2》等。
- 95) 単年度の在籍者数は《1954-3-12》《1955-10》《1955-8-5》も参照。
- 96) 《1954-8-10》《1954-3-13》《1955-10》《1955-8-2》等。
- 97) 単年度の在籍者数は《1954-3-13》《1964-3》《1955-10》《1955-8-5》も参照。
- 98) 《1965-1》。
- 99) 《1975-2-1078》は1952年3月31日、《1976-3》は1953年4月1日と記す。
- 100) 《1954-8-10》《1954-3-12》《1955-10》《1955-8-2》。
- 101) 単年度の在籍者数は《1955-10》《1955-8-5》《1954-3-12》《1964-3》も参照。
- 102) 《1954-8-10》《1954-3-12》《1955-10》《1955-8-2》。
- 103) 単年度の在籍者数は《1954-3-12》《1955-10》《1955-8-5》も参照。
- 104) 《1954-8-10》《1954-3-13》《1955-10》《1955-8-2》。《1989-1-11》は1951年と記す。
- 105) 《1954-8-10》《1954-3-12》《1955-10》《1955-8-2》。
- 106) 単年度の在籍者数は《1954-3-12》《1955-10》《1955-8-5》も参照。
- 107) 《1954-8-10》《1955-10》《1955-8-2》等。
- 108) 単年度の在籍者数は《1954-3-13》《1964-3》《1955-10》《1955-8-5》も参照。
- 109) 《1954-8-10》《1954-3-13》《1955-10》《1955-8-2》。
- 110) 《1954-8-10》《1954-3-13》《1955-10》《1955-8-2》。
- 111) 単年度の在籍者数は《1954-3-13》《1964-3》《1955-10》《1955-8-2》も参照。
- 112) 《1954-8-11》《1955-10》《1955-8-5》。《1965-1》は1949年4月1日と記す。やや後の時期の舞子見習いのための「夕ぐれ学級」も含め、《1979-2-73~76》も参照。
- 113) 単年度の在籍者数は《1954-3-12》《1955-10》《1955-8-5》も参照。
- 114) 《1947-1》。同史料中に「夕方学級」との記載もある。《1979-2-42》も参照。
- 115) 《1947-1》。
- 116) 《1976-3》は1950年7月10日と記している。
- 117) 《1975-2-1080》も参照。
- 118) 《1971-4》《1971-2-22》より。
- 119) 《1971-2-23》。
- 120) それぞれ《1976-3》、及び、《2000-1-112》《2004-1-116》等。
- 121) 《1971-2-23》《1975-2-1083》。
- 122) 《1971-4》《1971-2-23》。《1979-2-60~64》も参照。
- 123) 《1970-3》も参照。
- 124) それぞれ《1957-3-5》、《1959-2》、《1954-3-13》等。
- 125) 単年度の在籍者数は《1954-3-13》も参照。
- 126) 《1954-3-13》《1954-9》。
- 127) 《1954-3-13》。ただし《1975-2-1081》は1950年1月16日と記す。
- 128) 単年度の在籍者数は《1954-3-13》も参照。
- 129) 《1971-2-25》《1975-2-1081》。

- 130) それぞれ《1971-2-25》《1977-2-81》、《1954-3-13》等。
- 131) 《1969-1-35》《1971-2-28》《2013-1-12》。沿革は(2010-1)も参照。
- 132) それぞれ《1965-2-6》、《1966-4-8》、《1975-1-28》、《1975-2-1093》、《1963-1-11》。
- 133) 《1971-2-28》等。
- 134) 《1976-3》《1976-1》《1971-1-29》等。
- 135) 《1971-2-28》等。
- 136) 《1976-3》《1976-1》《1971-2-29》等。
- 137) 《1971-2-28》等。
- 138) 《1976-3》《1976-1》《1971-2-29》等。
- 139) 元史料は《1957-4》。開設日については、《1954-3-14》。《1979-2-64～65》も参照。
- 140) 《1954-11》《1954-3-14》。
- 141) 《1976-3》。
- 142) 《1954-3-14》。鴨甲村・鴨甲村中学校との記載が多いが、村の名前は公と思われる。
- 143) 《1975-2-1085》。《2017-1-17》は「飛騨共同浴場の二階の集会所」と記す。
- 144) 《2000-1-112》《2004-1-112》等。
- 145) 《1975-2-1085》。
- 146) それぞれ《1976-3》《1976-1》、《1975-2-1085》等。
- 147) 元史料は『朝日新聞奈良版』1950年1月17日。
- 148) 元史料は『解放新聞』号外、1955年3月3日付。
- 149) 元史料は『解放新聞』第78号、1955年4月15日付。
- 150) 元史料は《1998-3》。
- 151) 元史料は《1998-3》。
- 152) 元史料として《1957-4》も参照。
- 153) 《1954-15》。《1975-2-1087》は「春日夜間学級」。
- 154) 《1954-15》《1954-3-15》。
- 155) それぞれ《1975-2-1087》等、《1959-2》。なお《1954-15》は1952年4月とする。
- 156) それぞれ《1975-2-1087》、《1960-1-5》。
- 157) 《1975-2-1087》。
- 158) 《1954-3-15》。
- 159) 《1975-2-1087》。
- 160) それぞれ《1975-2-1087》、《1976-1》、《1954-3-15》等。なお《1976-1-2》等は1954年(月日付記載なし)とする。
- 1954 1 墨田区立曳舟中学校『学校要覧』
- 1954 2 三重県上野市立崇広中学校長竹島基三「夜間学級についての報告書」
- 1954 3 文部省初等中等教育局・中央青少年問題協議会『夜間に授業を行う学級をもつ中学校に関する調査報告書 第1部 学校ならびに生徒の実態』
- 1954 4 名古屋市立天神山中学校『二部学級 教育報告』
- 1954 5 立川市立立川第三中学校『第二部(夜間)学級経営』
- 1954 6 『毎日中学生新聞』1954年9月14日
- 1954 7 三重県上野市立崇広中学校『本校夜間部の実情に就て』
- 1954 8 京都市教育委員会・京都市立二部学級研究会『京都市立中学校 夜間部教育の研究』第5集
- 1954 9 「夜間学級設置校一覧」
- 1954 10 京都市教育委員会・京都市立二部学級研究会『第一回全国中学校夜間部教育研究協議会 第1回大会』
- 1954 11 奈良市立東市中学校長・松下正利「夜間特別授業の実態について」
- 1954 12 足立区立第四中学校第二部『本校に於ける夜間学級経営の実態』
- 1954 13 足立区立第四中学校第二部『夜間学級経営概要』
- 1954 14 足立区立第四中学校第二部『夜間学級の概要』
- 1954 15 新宮市立城南中学校「発表要項」
- 1955 1 足立区立第四中学校第二部『夜間学級経営概要』
- 1955 2 名古屋市立東港中学校「夜間学級生徒の環境及び生活と長期欠席生徒の実態」
- 1955 3 八王子市立第五中学校二部『学校要覧』
- 1955 4 全国中学校夜間部教育研究協議会『参考資料』
- 1955 5 東京都教育庁総務部調査課『中学校 夜間学級に関する調査報告書』
- 1955 6 立川市立立川第三中学校『第二部(夜間)学級経営』
- 1955 7 臼井甚八「義務教育を修了するに困難な事情にある生徒救済の途」
- 1955 8 京都市教育委員会・京都市立二部学級研究会『京都市立中学校 夜間部教育の研究』第6集
- 1955 9 世田谷区立新星中学校「夜間学級の概要」
- 1955 10 京都市立中学校二部学級研究会「共同研究結果概況」
- 1955 11 東京都大田区立糶谷中学校第二部『学校要覧並に生徒実体調査の一部』
- 1955 12 横浜市立浦島丘中学校「地元民の熱意がもりあげた二部学級について」
- 1955 13 「墨田区立曳舟中学校夜間部について」
- 1956 1 京都市教育委員会・京都市立二部学級研究会『京都市立中学校 夜間部教育の研究』第6集
- 1957 1 足立区立第四中学校第二部『学校要覧』
- 1957 2 京都市教育委員会・京都市立二部学級研究会『京都市立中学校 夜間部教育の研究』第8集
- 1957 3 全国中学校夜間部教育研究協議会・横浜市公立中学校長会『夜間学級の実態』
- 1957 4 「長欠対策として夜間学級の現況」奈良県同和問題研究所『明けゆく社会』第36号

参照史料

年度	番号	資料主体	史料名
1947	1	大阪市立勝山中学校	『学校沿革史(昭和22年度起)』
1950	1	上野市立崇広中学校	「生徒数調」
1951	1	足立区立第四中学校二部	『夜間学級経営概要』
1951	2	上野市立崇広中学校	『不就学対策実施概要』
1951	3	上野市立崇広中学校	『不就学対策としての夜学概要』
1951	4	足立区立第四中学校二部	『夜間学級経営概要』
1953	1	墨田区立曳舟中学校二部(夜間部)	『墨田区立曳舟中学校二部(夜間部)概要』
1953	2	足立区立第四中学校二部	『夜間学級経営概要』

- 1957 5 森義雄「長欠対策」『奈良県教育』第46号
- 1958 1 墨田区立曳舟中学校『ひきふね 10周年記念誌』
- 1958 2 世田谷区立新星中学校『十年のあゆみ』
- 1959 1 和田清和「八幡町の夜間学級」
- 1959 2 「全国夜間中学校要覧」
- 1959 3 大田区立糀谷中学校第二部『夜間学級の概要』
- 1959 4 横浜市立蒔田中学校・倉田定昌「不就学問題とその分析」
- 1959 5 世田谷区立新星中学校第二部『夜間中学校五年間の歩み』
- 1960 1 全国夜間中学校研究協議会『第7回 全国夜間中学校教育研究協議会大会要項』
- 1961 1 京都市立皆山中学校『二部開設十周年記念誌』
- 1961 2 京都市教育委員会・京都市立二部学級研究会『京都市立中学校 夜間部教育の研究』第12集
- 1962 1 大田区立糀谷中学校二部『二部学級要覧』
- 1962 2 墨田区立曳舟中学校夜間部『十年の歩み』
- 1962 3 墨田区立曳舟中学校夜間部『本校の問題点』
- 1962 4 世田谷区立新星中学校二部・安藤稔「東京都夜間中学生徒減少の問題について」
- 1963 1 田中勝文「『夜間中学』の問題」『教育』13(2)
- 1963 2 名古屋市立天神山中学校「生徒数漸減傾向に対する方策如何」
- 1964 1 東洋大学教育研究会『夜間中学 資料編』
- 1964 2 上野市立崇広中学校「夜学関係報告」
- 1964 3 「夜間中学校生徒数変遷資料」
- 1964 4 「糀谷中学校二部学級要覧」
- 1964 5 大田区立糀谷中学校第二部『夜間中学歴史資料』
- 1964 6 東京都夜間中学校研究協議会編『東京都夜間中学校十四年の歩み』
- 1964 7 墨田区立曳舟中学校夜間部『沿革概要』
- 1964 8 墨田区立曳舟中学校第二部(夜間部)『学校要覧』
- 1965 1 専修大学学生会教育研究会『夜間中学』
- 1965 2 全国夜間中学校研究会『第12回全国夜間中学校研究大会大会要項』
- 1966 1 大田区立糀谷中学校二部『夜間中学歴史資料』
- 1966 2 東洋大学社会学研究会『全国夜間中学生実態調査』
- 1966 3 長田三男・尾形利雄『戦後におけるわが国勤労青少年教育の研究』民主主義研究会
- 1966 4 全国夜間中学校研究会『第13回全国夜間中学校研究大会大会要項(資料)』
- 1966 5 世田谷区立新星中学校第二部『第二部概要』
- 1967 1 世田谷区立新星中学校第二部『学校要覧(資料)』
- 1967 2 世田谷区立新星中学校第二部『学校要覧』
- 1967 3 全国夜間中学校研究会『第14回全国夜間中学校研究大会大会要項(資料)』
- 1967 4 尾形利雄・長田三男『夜間中学・定時制高校の研究』校倉書房
- 1968 1 全国夜間中学校研究会『第15回全国夜間中学校研究大会大会要項・研究資料』
- 1968 2 世田谷区立新星中学校第二部『学校要覧(資料)』
- 1969 1 葛飾区立双葉中学校第二部『学事報告』
- 1969 2 全国夜間中学校研究会『第16回全国夜間中学校研究大会大会要項・研究資料』
- 1970 1 全国夜間中学校研究会『第17回全国夜間中学校研究大会大会要項・研究資料』
- 1970 2 葛飾区立双葉中学校第二部『学事報告』
- 1970 3 大阪市立天王寺中学校夜間学級共同報告「夜間中学の教育の課題と実践」
- 1970 4 都築達郎「知らないことは差別することだ」『月刊社会教育』No.150
- 1971 1 江戸川区立小松川第二中学校『夜間学級の記録』
- 1971 2 全国夜間中学校研究会『第18回全国夜間中学校研究大会要項・研究資料』
- 1971 3 東京都夜間中学校研究会調査研究部『全国夜間中学校学校・生徒調査概要』
- 1971 4 「大阪市の夜間中学」
- 1971 5 八王子市立第五中学校夜間学級『八王子に於ける夜間中学校の概要』
- 1973 1 葛飾区立双葉中学校二部『二十年の歩み』
- 1974 1 全国夜間中学校研究会『第20回全国夜間中学校研究大会大会要項・研究資料』
- 1974 2 墨田区立曳舟中学校夜間部『二十年の歩み』
- 1975 1 全国夜間中学校研究会・広島夜間中学校連絡協議会『第21回全国夜間中学校研究大会要項・研究資料』
- 1975 2 『ルンプロ元年 父母の歴史を受けつげ仇打ち 連続射殺魔 永山則夫の「私設」夜間中学』
- 1976 1 東京都夜間中学校研究会資料室・昭和51年度第2回都夜中研大会発表「全国夜間中学校開設廃止一覧」
- 1976 2 横浜市立浦島丘中学校『夜間中学のあゆみ』
- 1976 3 東京都夜間中学校研究会総務部・史料室(松崎運之助)「昭和51年度 第22回全国夜間中学校研究大会 第2分科会夜間中学の歴史に関する諸問題」
- 1976 4 大田区立糀谷中学校第二部『あゆみ 特別号』
- 1976 5 松崎運之助『夜間中学の歴史』東京都夜間中学校研究会資料室
- 1977 1 京都市立郁文中学校『郁文中学校二部学級のあゆみ 開設10周年記念』
- 1977 2 江戸川区立小松川第二中学校『小松川二中夜間学級五年のあゆみ』
- 1978 1 松崎運之助(1978)「夜間中学のあゆみ」『ある夜間中学の記録』文化座
- 1979 1 三重県総合教育センター編『三重県の教育史 年表統計編』
- 1979 2 松崎運之助『夜間中学』白石書店
- 1980 1 全国夜間中学校研究会『第26回全国夜間中学校研究大会大会記録』
- 1981 1 足立区立第四中学校第二部『開設三十周年記念式・祝賀会』
- 1981 2 足立区立第四中学校第二部『開設三十周年記念誌』

- 1982 1 八王子市立第五中学校夜間学級『開設三十周年記念記念式典』 『教育学の研究と実践』 第12号
- 1982 2 東京都教育委員会『東京都公立中学校夜間学級要覧』
- 1983 1 葛飾区立双葉中学校二部『ふたば 開設30周年記念誌』
- 1983 2 太田区立糞谷中学校第二部『あゆみ 30周年記念特集』
- 1984 1 世田谷区立新星中学校第二部『新星中学校第二部・三十年の歩み』
- 1986 1 東京都夜間中学校研究会正副部長編集委員会『東京都夜間中学校研究会25周年記念資料』
- 1989 1 近畿夜間中学校連絡協議会事務局『夜間中学から』
- 1989 2 京都市立郁文中学校・京都市立中学校二部学級研究会『郁文中学校二部学級 20年のあゆみと研究』
- 1991 1 足立区立第四中学校夜間学級『開設四十周年記念誌』
- 1992 1 東京都夜間中学校研究会『東京都の夜間中学校の歩み』
- 1993 1 墨田区立曳舟中学校夜間部『40年の歩み』
- 1994 1 世田谷区立新星中学校夜間学級『新星中学校夜間学級四十年のあゆみ』
- 1997 1 足立四中夜間学級『五十周年のあゆみ』
- 1998 1 墨田区立曳舟中学校『曳舟 閉校にあたって』
- 1998 2 墨田区立曳舟中学校夜間学級『四十六年の歩み』
- 1998 3 奈良県立同和問題関係資料センター『戦後奈良県の同和教育関係史料・年表』
- 2000 1 全国夜間中学校研究会『第46回全国夜間中学校研究会大会記録誌』
- 2000 2 京都市立中学校二部学級開設50周年記念事業実行委員会『京都市立中学校二部学級開設50周年記念誌』
- 2001 1 足立区立第四中学校夜間学級『祝・開設五十周年 夜間学級案内』
- 2001 2 足立区立第四中学校夜間学級『五十周年のあゆみ』
- 2001 3 足立区立第四中学校夜間学級『開設五十周年記念誌』
- 2001 4 栗田克実「公立夜間中学の諸問題」『北海道大学大学院教育学研究科紀要』 83
- 2004 1 第50回全国夜間中学校研究会大会実行委員会『第50回全国夜間中学校研究大会記念誌』
- 2010 1 植田宜博「夜間中学（中学校夜間学級）の現況とそこに学ぶ人たち」『和歌山大学教育学部教育実践センター紀要』 20
- 2011 1 足立区立第四中学校夜間学級『開設六十周年記念誌』
- 2011 2 東京都夜間中学校研究会『東京都夜間中学校研究会50周年記念誌』
- 2013 1 近畿夜間中学校連絡協議会『40周年記念誌』
- 2013 2 江口怜「学校社会事業としての夜間中学」『東京大学大学院教育学研究科紀要』 53
- 2014 1 浅野慎一「戦後日本における夜間中学の卵生と確立」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』 7 (2)
- 2015 1 江口怜「1950年代の和歌山県における部落子ども会と夜間学級」東京大学大学院教育学研究科基礎教育学研究室『研究室紀要』 (41)
- 2017 1 横関理恵「戦後における中学校夜間学級の成立過程」